デュルクハイム著
橋本文夫譯

マイステル・エックハルト

——獨逸的信仰の本質——

理想社刊行

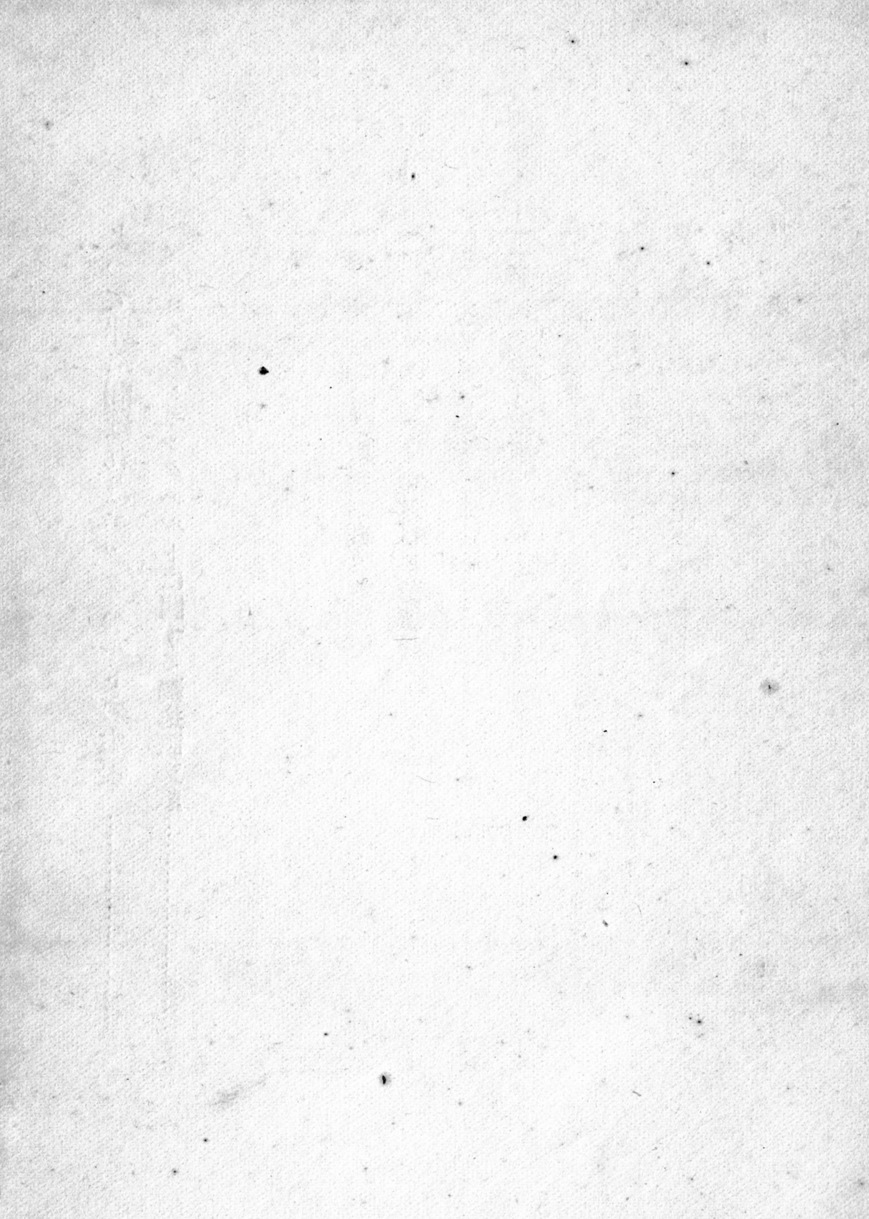
序

本書は獨逸最大の宗敎家マイステル・エックハルトの思想を、日本に於ける一般敎養の士に紹介する目的から著したものである。獨逸人の內面的な生活記錄としては、恐らくこれ程深いものはあるまい。獨逸人と同じく深い信仰生活に生きる日本人にとつて、獨逸精神を理解する一番の近道がここにあるやうに思はれる。このやうな意味から、多少とも日獨兩國の精神的な理解に資する所があれば、著者の願ひは充たされるであらう。

尙エックハルトの思想のほかに、彼の生涯と事業の槪說を附し、更に一段と深く硏究をして見たいといふ人のために、卷末に極めて若干ながら、文獻を擧げておいた。

八　神……八〇
九　エックハルトの「氣分」……九五
一〇　充實と崇高さとしての「一者」……九九
一一　神的生命……一〇八
一二　内面性と活動……一一六
一三　正義と苦惱……一二六
一四　エックハルトに於ける流動性……一三三
一五　總括にして總括に非ざる總括……一三七
一六　結び……一五三
三、エックハルトの生涯と事業……一六三
教會との鬪ひ……一七七
四、一三二九年三月二十七日ヨハネス二十二世に

よつて罪に問はれたエックハルトの主張……………一九〇
マイステル・エックハルトに關する獨逸語文獻……………二〇〇



一、序說——マイステル・エックハルトと現代

十三世紀の一僧侶で神祕家たるマイステル・エックハルトが現代に何の意味があるといふのか。全神經が勝利の獲得を目指して緊張してゐる今日、未來が決定されようとしてゐる今日、六百年も前に孤獨の中に死んで行つた人間、而もその活動の故に生活に敗れ、同時代の者からは擯斥せられ、五百年以上も忘れ去られてゐた人物を回想して、何になるといふのか。誰しもかうした疑問を感ずるであらう。

これに對する返事はかうである。《エックハルトこそは、我々が戰爭に於て勝利を得るだけでなく、平和に於て勝利を得る上に、力となるが如き人物の一人で

ある。》と。彼を回想することは、行動への最大自由の道を開く力ともなる。而して未來の建設にとつては、彼の教理が何にもまして重要である。地球の新秩序は人間の内面的な秩序の表現であつてこそ、永續性をもち得るのであるが、新秩序にこのやうな要求をかける以上、エックハルトの事業を回顧することは、確かに有益な事であらう。蓋し、この人物こそ、人間生活の現實を――あるがままの現實とあるべき現實とを――いささかの曇りもなく胸中に現はした稀に見る惠まれた人物の一人であるからである。エックハルトが我々の胸中に燃え立たせる光は、我々獨逸人から見れば、凡そ更に理想的な未來への道を照し出してゐるのである。

今日、地球を震撼せしめるこの大葛藤の背後に、ここにもかしこにも鳴り響く合言葉の應酬の背後に、實は精神的な問題が決定されようとしてゐるのだといふことは、誰しも感じてゐる。人間の最も深い生き方といふ意味に於て「精神的」

な問題が提起され、また實生活の發する問ひに「精神的」な答へが與へられるのであるが、このやうな生活の意義は何であらうか。また人間は個人として如何にあるべきであらうか。

今日、武力を以てする闘爭が火花を散らしてゐる。この闘爭過程に於て、諸民族の未來、この地球の未來の姿が決定される。民族も、都市も、村落も、戰亂の燃ゆる息吹に觸れないものはない。どこを見ても言ひ知れぬ苦難ばかりである。一體、二十世紀ともあらうに、これは又何としたことかと、幾たびか自問もして見るであらう。これは惡夢なのだ、現實ではないのだ、といふやうにも思へるであらう。地球にはすべての人間を容れる餘地がないのであらうか。どうしても武力に訴へて事を解決せねばならない程、人類の理性は發達してゐないのだらうか。然り、ただ一つ明かとなつた點があるとすれば、それは、人類が未だ未發達の狀態にあるといふことである。この點を夙に理解してゐる者をも未だ理解を失はな

い者をも、心底より動搖せしめる程の未發達の狀態にあるといふことである。だが、若し人間に眞の反省を求めるものがあるとすれば、それは將兵の一死奉公と母の聖なる涙とである。若い時に偶〻感奮興起して二三週間の修行鍊成を積み暫時はその態度を持しながら、軈て再び個我的な自己主張の擒となり、市井巷間の生活にがんぢがらめに縛られて最早逃れるすべもないのに氣がついて我ながら驚かされた人間がどれほど多いことであらう。彼等を救ふ道は、盡忠報國、一死奉公の一途あるのみであつたのである。

だが、何十萬の人間が斃れながら、一方には幾百萬の人間が生き殘つて、只管におのが生活を美化し保身に汲々としてゐるとしたら、どうであらう。國民の一人一人が戰場に於て祖國に殉ずる覺悟をもちながら、ひとたび軍服を脫ぐや、眞理のために鬪はうとも考へず、最大限の保身をこれ事とし、善良な國民として認められることのみを以て足れりとすれば、どうであらう。事實、かうした事態を

見る限り、人間は未ださほど進歩したものとは言ひ難く、「理性」は——理性の無力を疑ふ者は今日まだ頗る多いのであるが——未だ眞に理性といふべき域に全然達してゐず、未だ理性が生命の自覺であるとは言ひ難い。事實、今日までの所では、理性は主として、生命の深い要求に對抗して己れを主張——勿論そこにも犧牲は伴ふが——しようとする種々の力、何等犧牲を好まぬ純然たる生存の力によつて用ひられる武器であるに過ぎない。人間が理解し合ひ意志を疏通し合ふといふことは、眞の理性と同じく、人間的成熟の問題である。而して人間的成熟は、人間の存在が人間の自己主張のみに盡きないといふことを前提としてゐる。卽ち各自が大いなる生命の部分的な表現なることを理解し、自己の生活要求の限界を悟るといふことを前提としてゐる。さうでなければ、人間の精神は、脅威に曝された自己保存と自己貫徹の意欲の意識的な姿として、建設的な力をもつに過ぎない。して見れば、生活の危險が除去され權力慾が滿たされた後に始めて、人間の

成熟は超克を前提としてゐる。而して最高の境地に到達して而も日常茶飯の事を忘れない者でなくては、その眞諦を語ることはできない。マイステル・エックハルトは、まさにこのやうな人物であつた。

精神が立派な花を咲かせることができるやうになるといふわけである。だが、成熟は小細工的な才智によつて置き換へることはできない。

折に觸れては、人間存在の全貌が圖らずも意識せられ、自己認識に到達することがある。これこそは、個人の生涯に於て、人生の十字路に立つ人間が神に走るか惡魔に參ずるかが決定される一大危機である。目まぐるしい生活のさなかにあつて、無限の靜けさの澄み切つた聲が慈悲深く物やはらかな訓戒を垂れ、而もその聲が掻き消さうにも消されぬやうなことがある。そのやうな場合に、人間は己れを閉ざし傲岸にも頑固な態度をとつて飽くまでも勝手な道に自己主張を試みることもあらうが、また己れを開き、己れに嚴なる態度を以て生れ變り、敬虔にも

我執を斷つて生命の聲に耳を傾けることもあらう。理窟は分つてゐながら、良心に顏を背けてこれを裏切らうとするとき、大いなる生命が喝然と呼び掛けることもある。こんな時には危機寸前で奈落の淵から取つて返し、新規蒔き直しの出發をするであらう。だが、絶對者が人間に最も近づくのは、勝手氣儘な道で一敗地に塗れ、絶望の揚句に個我の砦ががらがらと崩れ、自らはこの殘骸の中に虚僞と惰性と我執の故に落ちぶれ果ててしまつたときである。その時、暗黑の中に一道の光明の如く、大いなる存在が輝き出で、慈悲深い力が彼の手をしつかと捉へるのである。而も猶、この救ひの手を摑まへるか突き放すかは彼の自由であり、たとひ摑まへたとしても、しつかといつまでも摑まへてゐるか、それとも放してしまふかも、彼の自由である。本當にその手を摑まへる人間は稀である。時あつてか、眞に這般の妙諦を解し、その悟つた所を生活に實現するやうな人間が現はれることがある。このやうな人間は、現實の生活に於て成功するか否かには關係な

く、それを感ずるだけの能力のあるすべての人にとつて、力の源泉となる。更にまた人間のこのやうな永遠の運命を營め盡し究め盡した上で、己れの體驗を人に告げる使命を帶びた人間が現はれることがあるが、これこそは蓋し眞に稀である。そのやうな人間は人間そのものが極めて非凡であるのみでなく、その言ふ所も亦非凡である。彼をめぐつて騷然たる物議が持ち上がり、感激した人達が彼に附き從ふ反面には、そのために身の危険を感ずる徒輩が彼を攻撃し、やがて彼は反對者の現實的な勢力に壓し潰され呑まれてしまふ。だが、これも亦彼の生活に必然に附き纒ふことであつて、これがために却つてその生活に遠く時代を超えた榮光が與へられる。騎士は單に生きることによつてでなく、寧ろ忠烈なる死によつて眞理の象徵となり、時代の變遷を乘り越えて神的な力を後世に及ぼすのであるが、右のやうな處世の騎士も亦然りである。處世の騎士は、生前夙に己れに打ち勝つて靈の自由を得てゐるのであるが、肉の死によつて更にこの勝利を裏書きするの

である。マイステル・エックハルトは實にこのやうな人物であつた。

マイステル・エックハルトの叡智は、あらゆる空間的・時間的な限界を越えて輝いてゐる。時代とともに人は移り生活形式は變り、地上の民族も人種を異にし土地を異にしてゐるけれども、人間生活の深義・本質・眞實性は、いづの時代にも、いかなる場所でも、同じである。低劣なる勢力との鬪爭に於て勝利者となり指導者となり得る民族は、地球の物的なる力を解放して己れのために利用する能力に於て他に優るのみでなく、地球の生命の深義を絶對者の立場に立つて子々孫孫まで實現して行くことの出來るやうな民族であらねばならない。無常な存在とは言へ、その生活形式の變遷を貫いて恆常なる眞理を護り續ける者のみが、永續的な自己主張をなし得るのである。時代により民族によつて眞理の姿は變るけれども、眞理に徹し得た者は、たとひ出發點はいかに異つても、同じく窮極の眞理に徹し得た者と、提携するのである。だが、それにしても、我々相互の理解には、

徹し得ない限界があるのではなからうか。民族の性格が根本的に隔つてゐるのではなからうか。

もとより、それは今日我々の知る所である。自己の性格に對する絶對的な忠實、固有な特殊相の肯定、固有の表現、固有の空間、固有の民族的運命、民族と民族共榮圈のためにする無條件の獻身、かういつたものを通じてこそ人間は己れを完成することができ、延いては眞理を生活的に體現し更に獨自的に認識することができるのだといふことも、我々の知る所である。己れに固有な現實を自主的に貫き通すことによつて始めて眞理を發見することができる。而も猶、高い山の頂が、その屹立する所を異にしながら同じ光を受け同じ太陽に照らされては照り返し互ひに呼應するが如く、時代の暗黒と民族の隔てを越えて、歷史の懷から生れ出た山々が人間世界にも屹立してゐるが、その共通の叡智は、山々の照り映ゆるが如く、同じ永遠な眞理の反映なのである。時に雲が視界を遮ることがあり、山の周

圍に生息する人の姿すら、附近の谷間の暗黒に影を沒したかに思はれることもある。人みな最早望みを斷たれ、稀に暗黒より光明へよぢ登る者があるとき、折ふしおのが憧るる山の頂が再び姿を現はすことがある。おのが住まふ谷間以外に頂を極める道とてはないけれど、遂に頂へ達し得た者の眼には、別な山の頂の照り映ゆるさまが遙かに見られるのであるが、これとても、己れを包む光と同じ光の反映に過ぎない。マイステル・エックハルトは、獨逸人の精神の國土に聳えるこのやうな頂であつたのだ。

エックハルトは獨逸人である。エックハルトと同じ土に生れ育ち、獨逸的な性格と生命の限りなき深みの中から、獨逸的な精神の河原石を踏み叢林を掻き分けて、この大師匠の許へ登りつめた者でなくては、この巨山の頂に達し得ないであらう。而して山巓に開ける視界も、獨逸人としてそこに立つ者にのみ望み見られるであらう。だが併し、山巓に立つ者の眼に映ずる大いなる光、彼を包む輝き、

彼を取り圍む靜けさは、附近一帶の山々を――いかに遠く隔たつた山々でも――登りつめた者ならば、齊しくあづかる筈であらう。このやうな高みに立つとき、我々の大地は結局ただ一つの源から眞の力を與へられ、ただ一つの掟に服し、高みに登りつめた人間ならば、どこから旅立つたにしても、同じ大地に於て相會することができるのだといふ法悅的な確信が、豁然と開かれることであらう。

このやうな高みに立てば、二つの事が明かとなる。我々を共通に照らす光は、己れの住まふ生活空間の特殊の相を隈なく照らし出すのである。我々すべての人間にとつて永遠に同じ光、我々を限りなき遠隔の地と結びつける光が、己れ自身に固有な特殊の相に對する忠實な態度に、我々を否應なく立ち歸らせるのである。他方、全世界の登山者が、素人の犯す誤謬について同樣の經驗をなすが如く、認識に從事する精神の登山路にも、今なほ人類の登攀を妨げる永遠の誤謬がある。

我々は今なほ機械の風靡が生命を脅す時代の支配下に立つてゐる。當時は、自

然の力に服從することによつて、生活の物質的・外面的な條件を改善しようとい
ふ一事にのみ人間の精神が捉はれてゐた時代であつた。この時代の大きな動きが、
人間を次第次第に內面的な靈の世界から引き離して、外面的な時間空間的な世界
へ向けて行つた。されば、おのが職務上又は性格上、內面的な世界への傾向をも
つた人間が、時代の流れに反抗の意識をもつことは、當然であつた。周圍の動き
をば、おのが魂を見失ひ高きものに目も呉れない人間の焦燥と利己とから生じた
全く別な動きだと感じてゐた。このやうな人たちは、精神の本來の國土と感ぜら
れる內面の國土に仕へることこそ、當面の彼等の責務だと考へてゐた。事實、學
者の活動も藝術家の活動も、世の動きをよそにしたものであつた。學者は目に見
える勞苦の報酬やおのが硏究の世間に及ぼす影響などは全く考へもせず、專ら眞
理のみに對する義務感から、着々と認識の成果を擧げて行つた。萬象を支配し生
命を支配する秩序の神祕のみをこれ事とし、歷史的現在より發して人間を突き動

かすやうな問題は意にも介しなかつた。彼等は時代に對しては多分に風來坊であつた。而も猶その純粹な努力は、時代にとつて不可缺な補ひとなつてゐた。彼等は言はば一段と高い世界の良心を以て自ら任じてゐた。藝術家も亦同樣に、己れを取卷く世の動きをよそに、只管内面的體驗と象徵的形象との國土を築き上げるために制作活動を續けてゐた。一は永遠の眞理を求め、他は永遠の美を表現しようとするのであつた。また他方に於ては、研究や制作にこそ從事はせぬものの、生活の外面化や功利化や尺度化の滔々たる風潮に對抗して、おのが性格の重みと内面への意欲とを以て、單に人間としての風格を主張しようとする人もあつた。このやうな人間は、稀には僧侶もあつたが、僧侶でない者も、恰も僧院にあるが如く、人生の意義は外面的な活動でなく内面的な完成にあるのだとの意識から、只管おのが内面生活を築き上げ、これによつて時代に抗議するのであつた。

時代の滔々たる風潮に對する内面性のこの抗議は、一つの點に於ては、確かに

無益であつた。時代の長所が悉く內面の側にあつて、他の側には缺點しかないといふやうなものではなかつた。大地と大地の建設に眼を向ける人たちの方が、寧ろ生氣に溢れてゐた。彼等はどの生活部門に於ても開拓者であつた。謂はば逞しい骨をもち、生活の意氣に溢れ、雄々しく前進する氣魄に滿ちてゐた。大地の子を以て自ら任ずるだけでなく、寧ろ生れながらにして大地の支配者であり、地上の生活を思ひのままに支配するために生を享けたのであつた。都會に集中した民衆に組織を與へ、技術によつて民衆の生活を容易ならしめる必要が感ぜられた。人間の奴隷化を機械によつて打破せねばならなかつた。要するに、これらは否定し去ることのできない任務であり、强者の採るべき道であつた。世界到る所に同じ叫びが叫ばれた。それは「建設!」といふことであつた。これこそは十九世紀の大きな叫びであつた。この壓倒的な叫びの前には、內面性の微かな叫びは、影の薄い、時代に合はぬ叫びとして、吹き消されてしまつた。己れの力を意識し新

たな創造の喜びに溢れ、危險をも恐れず、飢ゑるばかりの認識慾と逞しい建設力を以て、時間空間的な現實に立ち向つて行くこの態度から見れば、內面の國を只管事とするやうな人間は、惰弱と舊套との代表者のやうに考へられるとともに、內面性を事とする人間から見れば、大地に眼を向けた開拓者たちは、凡そ精神とは緣の遠い物質主義者のやうに思はれてゐた。

事實、この兩陣營に於て眞に價値ある生活を爲し、ただその態度の相違のゆゑに互ひに疏隔し互ひに憤慨し合つてゐた人間が、いつしか益〻敵對關係に立つに至つた。だが何れの側にも危險が伴つてゐた。外界へ眼を向けるのも、魂へ眼を向けるのも、ともに危險を伴つてゐた。一は徒らなる外面化の危險であり、他は世界から逃避する危險であつた。このやうな危險は、人間の採る態度が孤立的になればなるほど、大きくなるものであるが、事實さういつた傾向が現はれた。兩陣營は益〻離れ、益〻敵對的になつた。かくして最早眼中に外界しかない物質一

點張りの組織的意欲をもつ者どもは、靈的價値とか傳統とか共同的信仰とかいふやうな、過去から流れ來つたものを悉く破碎した。このやうな態度にとつては、高い價値の內面の世界は存しなかつた。物質のみが現實であり、冷徹な知性を以て物質を支配し大衆の福祉を齎す人間のみが、現實に即した人間であつた。かくして築き上げられた力は絶大であつた。このやうな力のゆゑに人類に加へられる危險も亦、絶大であつた。

かくして內界に向けられた人間の能力が、益〻聲を大にしてこのやうな惡魔的な發展を指摘したのは當然であつた。併し他方に於ては、內面に向ふ能力そのものも、生命に背いた發展をなしたのである。即ち相手方の陣營の外面化と物質主義とに對して戰ひながらも、それは單に言論による戰ひにとどまつて、建設的な力を伴はなかつた。浪漫的に自らの內面的感情の中へ引き退き、生命の破壞を喞ちながら、その實、外部の世界から獨り高しとして退いてゐたのであるから、相

手方の陣營と同じく生命に不忠實であつたのである。高次の價値の世界とか、普遍的・人間的な理想とか、絕對的な眞とか美とかいふやうなものを夢み、物質的な問題に對しては全く超然としてゐた。だが、これも亦生命に對する裏切りであつた。魂を忘れて時間空間的な生活に捉はれてしまふことが、生命に對する犯罪であると同じく、歷史的な現實に對して何等の責任をも感じない內面の國土も亦、生命に對する犯罪である。されば、何れの側に向つてにせよ、他を否定して已れのみを極端に主張するとすれば、生命の全一性は分裂させられたこととなるのである。かくして中正は失はれ、內面的な能力も外面的な能力も、ともに不生產的な、生命を害ふものとなつてしまつてゐたのであつた。

一切のものが寸斷されたかに見えた人間精神の絕望狀態から、極度の破壞に曝されるとともに健全な中核の害はれることの最も少かつた民族の革新運動の中から、全一的な生命の內なる力が湧き起つて來た。生きた全一體の聲が民族的な共

同體の復興の中から起つて來た。東洋に於ても西洋に於ても、革新運動は、全一的な生命の寸裂分斷に對する反抗の表はれに他ならなかつた。あらゆる方面に向つてこの革新運動から發せられた叫びは、逸脱する能力を再び糾合する中核の聲であつた。外部的な建設の力と內面的な觀照の力とが一つとなり、この二つの力の基礎でもあれば目標でもある民族的生活共同體てふ眞實なるものを實現しようとする努力となつた。物質的な建設、技術、經濟、組織力等が、民族の生活主張と結びつけられることによつて、包括的な深い意味を與へられたと同樣に、科學者や藝術家の努力も、否、凡そ內面的な制作活動も、民族の本質實現の埒內に包攝されることによつて、歷史的な意味が與へられた。舊來の理想主義者と現實主義者との對立は忽ち無意味なものとなつた。蓋し民族の自己實現、即ちその現實的な存立と本質展開とが、萬人の行動の現實的で且つ理想的な基礎となつたが故である。かくして生命はその全一性を回復した。大衆化及びその冷かな組織に代

つて、民族的な生活共同體の有機的な肢節組織が現はれた。個性をもつた人格の自己發現の意欲は、全一體に對する責任ある奉仕に服し、かくして自由な活動の天地を與へられるとともに、嘗ては徒らな個人主義に墮した人格の力が、今や守るべき限界を與へられた。精神的な職業に見られた形式的な價値、即ち抽象的な眞理や形式的な美や形式的な法が、不生産的な獨善を棄てて、今や民族的な生活共同體といふ内容的な基本價値に對して奉仕すべき價値として適當な地位を與へられた。民族國家、民族生活共同體が、あらゆる對立を克服し、一切の能力を糾合して有效なる共同活動をなさしめるに至つた。

このやうな推移を囘顧するとき、十九世紀に見られた生命を危くする發展とは異つて、世界史的な規模に於て生命に卽した發展が始まつたのだといふことは、疑ひを容れない所である。今日の激戰苦鬪の中にあつて、この發展は、歷史的な熱火の試練に耐へてゐる。平和時代に國內の破壞的な分子との鬪爭に始まつた所

のものが、生死を賭する外敵との闘爭に於て成就されようとしてゐる。すべての力をただ一つの目標たる勝利へ動員することによつて、ただ一つの全一體を目標とする力の大綜合が完成せられようとしてゐる。だが併し、民族國家なるものが、今世紀を動かすあらゆる問題を解決し盡したのだなどと考へるとすれば、我々今日の人間は致命的な過誤を犯すこととなるであらう。事實、さうではなく、まだまだもつと根本的な葛藤があるのだ。民族も祖國も今日全く無條件に、すべての個人の全的な奉仕を要求してゐるといふ事實からも、この葛藤が充分に明かに知られる。國家が個人に對する無條件な支配者となり、個人が無條件に祖國への奉仕に己れを捧げれば捧げるほど、國家への奉仕が、內面的な觀照と人格的・外部的な生活建設の活動との對立葛藤を解決したと同樣に、獨自的に生きようとする個人の權利と個人の獻身的努力を要求する共同體の權利との間に存する昔ながらの葛藤をも文句なしに解決するやうに感ぜられるであらう。だが、かう決め込ん

でしまつて安閑としてゐるのは、今日に於ける生活問題が事實いかに深刻なものであるかといふことに、眼を閉ざすこととなるのである。我々の歴史的な生命を荷ふ根本價値として民族國家を肯定することが、個人と共同體との葛藤、並びに内界と外界との葛藤を解く所以ではあるけれども、さればとて、人間といふものが抑〻二つの世界に住むものだといふ事實から生れる深刻な永遠の葛藤を解くものだとは言へない。

この儼然たる事實をいかに詳かに說くとしても、この二つの世界のうちの一方が抑〻概念的に說き得ざるものなるが故に、それは正しい敍述とはならない。この點を留保した上で始めて、人間は畢竟比喩的に言へば天と地との子であると言ふことが出來る。人間は時間空間的な世界に生き、從つておのが屬する民族的な生活共同體の成員であるといふだけでなく、同時に孤獨な存在であり、孤獨な存在として謂はば直接神の御許に立つてゐる。されば人間は、己れの屬する共同體

をも、己れに委ねられた大地をも、人生の意義として是認するとともに、他方に於ては己れ自身を宗敎的な意味に於て完成する永遠の義務があり、何人も人間をしてこの義務を脱せしめる者はない。大地と大地に住まふ諸民族の共同體とを建設すべき永遠の要請と個人的な魂を完成すべき要請、乃至は建設せらるべき大地の要求と救濟せらるべき魂の要求とが、相竝び、相對してゐる。抑〻現實とは何か、時代を超えた理念か、それとも理念の時間空間的な現象か、超時代的な精神の世界か、それとも時間空間的な歷史の世界か、彼岸にあると考へられる絕對者か、それとも人とともに變る時間空間的な世界か。人間の間に幾たびとなく對立を釀したこの問題にも、右に述べた永遠の葛藤が現はれてゐる。我々は何もののために生きてゐるのか、不壞なる天のためか無常なる地のためか。更に深刻に言へば、地がどつちみち避け難い課題である以上、天ゆゑに地のために生きるのであるか。それとも天がどつちみち避け難い課題たる以上、地ゆゑに天のために

生きるのであるか、我々はこの問題の解決を求められてゐる。これは古來人間の心を搖ぶつて來た問題である。生活を通してこの問題の解決に範を示した偉大な人物もある。が、人類そのものは、今も猶、この葛藤に捉へられてゐる。恐らくこの問題を解決することが、人類が次の一歩を進める前提となるのかも知れない。

だが、待て！　何が故に一體解決を求めるのか。何が故にこの二つの生き方を對立させるのか。この二つは決して對立したものではないのだ。問題の立て方が抑〻間違つてゐるのだ。――と叫ぶ人もあらう。この抗議には、ここでは暫く應へないこととして、先づこの問題が儼然として存在してゐるのだといふことを確かめて置かう。この問題が至る所に對立を釀し、人間を互ひに離反させ、民族を內部的に分裂させ、家庭を破壞し、苟くも自省の能力をもつ人間にとつて早晚深刻な葛藤となるものだといふことは、誰が疑ふものがあらうか。而も今日までの

所、この問題に明確な答へを與へた時代はないのだ。縦しんば問題の立て方が間違つてゐるとしても、この問題は儼乎として存在してゐる。思想によつてでなく行爲によつてこの問題を克服することは、飽くまでも重大な目標なのである。

この對立は、歴史的な現實に於ては、國家對個人の關係に現はれてゐる。即ち、國民宗教と世界宗教、卽ち民族的な生活共同體の宗教的な自覺と個人的な魂の宗教的な自覺との葛藤に現はれてゐる。必ずしもそれが公然たる反目軋轢となるわけではないが、外面的には、謂はば本質的に、國家といふものは僧侶を全幅的に信頼することはないものであり、兩者がたとひどんなに畏敬を表し合つても僧侶は僧侶で、結局國家ならぬ自分等こそ救濟の道をもつものだといふ信念を、今日に至るまで持してゐる。從つて、人生の意義は結局國家・祖國・大地に存するか、それとも苦惱からの救濟とか無とか超歴史的な絶對者とかに存するかといふ、この二つの生き方の何れを採るかといふ重大な決定を、あらゆるものが否應なしに

人間に迫つてゐるものの如くである。

かく言へば、また直ちに《いやいや、兩者は決して對立したものではない。》と異論を唱へる人も尠くないであらう。當然そのものの如くに一方の態度を他方の態度に從屬させるといふだけでなく、一見兩方の態度にひとしく善處するやうな調和的解決を無雜作にやつてのける人もあらう。けれども問題はこのやうな解決によつては所詮解決されない。完全な國家を建設するために獻身的に奉仕することが個人的な救濟の最善の道であるから、我々は國家をも肯定するのだ、などと言つて見た所で問題は片附かない。このやうな解決では、國家は相對的なものと見られ、單なる手段と化せられてしまふ。またそれとは逆に、個人的な救濟を目的とした敎育を施し、この敎育によつて一切の俗世間的なきづなから脫却させることこそ、眞に己れを滅却した公民を育む最善の前提條件なのだから、我々は個人宗敎をも肯定するのだ、と言へば、救濟の道が相對的なものと見られ、世間

的な秩序を建設する途上に於ける單なる手段と化せられてしまふ。だが、人間の置かれた情勢は、一方民族的な秩序をもつた大地の公民たるとともに個人的に開かれた天國の子であるといふ二重の面を全的に具へ、また具へてゐねばならないといふ事である。從つて飽くまでも對立は儼として存在し、人間のうちに深く根ざしてゐる。事實、この對立が人間を內面的に分裂させるとともに、人間と人間とを對立させるものではあるけれども、この眞の分裂こそは、畢竟、鬪ふ生命の姿である。これに反して、何事をも調和させてしまふやうな解決は、死である。この對立に深く捉はれ、己れに對しても人生に對しても懷疑する者こそは、一切の對立を無意味と觀じ、最早對立に苦しめられない人間よりも、眞理に近いのである。蓋し前者は未だ途上にあるに反して、後者は膠着狀態にあるが故である。眞の悟りは、生命そのものに具はるこの對立を滅じたり滅したりするのでなく、この對立を寧ろ尖銳化させて稔り豐かならしめる所へ落ち着くのである。一方の

態度を他方の態度ゆゑに否定する者は、素朴である。他方の態度をも採り入れて一方の態度を相對的ならしめる者も亦、邪道にあるのだ。正しい道は決して解決にあるのではなく、解決を求めての苦闘にある。何れか一方を採るといふことは、それが何れかに決定しようといふ意圖に出た以上は、勿論過つた態度であるけれども、人間の生きた姿として或ひは一に就き或ひは他に就く人間の去就に迷ふ不斷の道であるならば、それは寧ろ人間本然の姿である。解決を求めての苦闘に生きる人間のみが、兩態度の生き生きとした融合を經驗するのである。智的な解決といふものはあり得ない。智的には、何もかもが調和化されてしまふだけである。どんな對立でも、何等かの形式によつて解消させることができる。だが、そんな事をして見ても、生命の本然的な存在の面に於ては、何等變ることはない。本然的な存在の面は、只管に精進して止まぬ苦闘を要求するのである。

極めて重要な一例を示せば、國家の道も、救濟の道も、ともに人間が事物への

執着を棄つべきことを要求してゐる。されば日常生活に於ても、國家の道によつて要求される奉仕もあれば、救濟の道によつて要求される奉仕もある。何れに於ても個我の脫却が要求されてゐることは、爭ふ餘地なく明かである。而もかうしたことは、すべて智的にも洞察することができる。だが併し、ここに要求される個我の脫却を少くとも實踐するだけの萌芽をもつ人間にして始めて、この問題を眞に深く見ることができる。天も地も個我を脫却した人間を全的に要求するが故である。ここに新たな奈落が控へてゐる。この奈落を乘り越えることは、只管なる精進によつてのみ可能である。

層一層と深まるこの對立を問題としたのが、マイステル・エックハルトである。飛躍を怖れることこそ、生命の虛僞である。エックハルトの叡智は、虛僞を克服し奈落を乘り越えようとする自由から生れたものである。人間の本質は神である。だが、神は世界を規準として見れば、無である。他方、人間の本質は地で

ある。地は併し、神を規準として見れば、無である。この對立の中に人間が立つてゐる。而してこれがマイステル・エックハルトの問題である。

二、エックハルトの教理

一　エックハルトと禪

マイステル・エックハルト乃至神祕主義と禪とがどういふ關係にあるかと問はれれば、兩者には幾多の共通點があると考へて見たいやうな氣がする。けれども一體どういふ點に共通點があるかを明かにしようと思つて仔細に檢討して見ると、さつぱり共通點が見つからない。それならば兩者には共通點がないのだと言ひ切らうと思ふと、何かこの言葉が喉に引つ掛かるやうな氣がするのだ。若しかしたら兩者の意味する所は結局同じことかも知れないといふ氣がする。一體どういふ

點が同じなのだらう、若しかしたら高い山の峯のほとりや、澄み切つた朝の秋空に似通つた水晶のやうに玲瓏な雰圍氣がどちらにも存在してゐるといふことなのであらう。何れに於ても我々の心は暢びやかである。しつかと足を蹈まへながら、萬象を超越し、而も萬象のさなかにあるのだ。眼前に横はる世界全體が澄み切つて、世界の底の底まで見えるやうな氣がする。これがエックハルトであり、これが禪である。けれども人あつて《汝はそこに抑〻何ものを見るや。》と訊ねるならば、兩者の見る所は大いに異つてゐる。禪の眼前に展開する風景は、エックハルトの風景とは趣を異にしてゐる。少くとも我々の眼に映じ、我々が之を言葉によつて記述しようとする限りに於ては、然りである。けれども兩者が言詮を止めて、そこに見られるものに對して眼を閉ざし、そこに聞かれるものについて意味深き沈默を守るとき、この沈默が《エックハルトの見る所と禪の見る所は畢竟同じではないか。》と囁くのである。

寔に然り。寔に然らず。誰かこの問ひに敢へて答へるものがあらう。

エックハルトについて何か書けといふ依頼を受けた。隨分長い間エックハルトは筆者に附き纒うたけれども、抑〻彼がどんなことを言つてゐるか筆者は知らない。ただ彼の言說が正しいものだといふことだけは知つてゐる。それは禪の說く所が正しいものだといふことだけを知つてゐるのと同斷である。

二　エックハルトの理解

讀書といふことと理解といふこととは別物である。エックハルトを諳んじてゐながら一言半句も理解してゐないこともあれば、一言半句も讀まないのに理解してゐることもある。彼の說く所を日々の生活として行じてゐることもあれば、馬の耳に念佛といふこともある。エックハルトの精神の流れを我々はまた倶にする

が故に、この流れに荷はれ、この流れに徹してゐることもあれば、獨り岸邊に取り殘されてゐることもある。そんな場合にエックハルトの神髓について何を感ずるであらうか。エックハルトを繙くことはなまなましい生活過程となることもあれば、無益な暇潰しとなることもある。之を繙くだけの能力が具はつてゐれば、そこに何事かを經驗するではあらうが、彼が「何」を言つてゐるかは知らないのである。これと同樣に、以下エックハルトについて何事かを語らうとするのではあるけれども、エックハルトが「何」を說いてゐるかは之を言ふことが出來ない。從つて讀者諸賢も結局筆者は何も言つてゐないのだといふやうな氣持で全篇を讀んで頂きたい。かういつた氣持で讀んで頂けば、或ひはそこここに何事かを經驗せられ、或ひは單に《ふうん、成程。》と感ぜられるであらう。

エックハルトの說く所は思辨でもなければ思索でもなく、意見でもなければ結論でもなく、理論でもなく、生活の體驗であり、經驗であるのだ。生活の經驗を

述べることによつて、エックハルトはそれと同じやうな經驗を我々の心に呼び醒ますのである。それと同じやうな經驗をしたことがあれば、この經驗が謂はば裏づけられ、いよいよ意を强うするといふわけであるが、それでなければいまここで始めてその經驗をすることになるのだ。エックハルトの言葉を通じて、彼のなした經驗が我々の心に愬へるが故である。けれどもそれには一定の心構へが必要である。我々の心が、そこに語られる所を迎へ容れるだけに伸び切つてゐなければならない。これは理論的な好奇心といふやうなものではなく、心の憧れなのだ。「この說話は、己れ自身の生活として之を既に我がものとなしてゐる人、乃至は少くとも心の憧れとして之を具へてゐる人のみに說かれたものである。」とエックハルトも言つてゐる。

されぱエックハルトが神祕主義者だといふことを知つたり、彼を特殊な神祕主義者だと決めてかかつたり、その言說を心理的・哲學的・形而上學的な內容に從

つて記錄したり、人間の智識の大きな整理箱の何處か適當な場所へ入れたりすることは、エックハルトの理解とは何の關係もない。エックハルトの中には、心理學的な要素や、哲學的な要素や、形而上學的な要素が尠からず含まれてはゐるけれども、併しこれらの要素は、それが心理學的・哲學的・形而上學的である所にその本義があるのではなく、それは何よりも先づ一定の經驗の表現なのである。(之を「宗敎的」な經驗と名付ける人もあらうけれども、「宗敎的」といふ言葉を何事かを記錄するためのレッテルとして用ひれば寧ろ事態を誤る虞れがある。)

このやうな經驗が時には心理學的・哲學的・形而上學的な秩序概念を用ひて、己れの言はんとする所を人に傳へることがあるのは當然である。當時の學者的敎養の最高水準に立ち、時代の傳統的な拘束を受けてゐる以上、かういつた秩序概念が驅使せられるのは、寧ろ當然である。けれども讀者としては學者的敎養を一切拋棄されるのが最善の道である。學者的な敎養をお用ひになるならば、少くと

もエックハルトが用ひてゐる學者的な敎養を突き拔け、事態の眞相を己れの內に豁然と悟るといふ目的だけに利用するに留めて頂きたい。兎も角エックハルトの理解は、全人間的な成熟、卽ち人間の一定の發達段階の問題であつて、何等かの特殊な敎養の問題ではないのである。

三　試　論

「外なる人間が行動をなしてゐながら、內なる人間は全く行動を脫却して不動である場合がある。」とエックハルトは言つてゐる。《それはさうだ。それなら自分にも解る。自分もさういつた經驗をしたことがある。》と誰でも思ふだらう。果してさうであらうか。このやうな言葉はこれを經驗する深さに非常な懸隔があることがある。エックハルトの說く所は、凡そ考へられる限りの最も深い意味に考へ

られてゐる。例へば人間が「世の喧騒」の眞唯中にゐたり、或ひは致命的な攻撃を防がねばならないとか、己れの最も關心を抱く作品を制作中であるとかいふやうな刹那に於ける「内なる不動」とはいかなるものであらうか。ここに言ふ「不動」とはどういふ意味であらうか。こんな場合に果して大いなる「不動」を經驗するであらうか。ましてやこのやうな「不動」を眞に體得してゐるであらうか。

このやうな「不動」をエックハルトは次のやうな實例によつて説明してゐる。「扉には扉の廻轉すべき蝶番がある。扉の板は外なる人間に譬へられ、蝶番は内なる人間に譬へられる。さて扉が開閉すれば扉の板は動くけれども、蝶番は一個所に不動を保ち、何等運動によつて左右せられない。人間の『不動』といふことも亦然りである」。我々人間は斯くの如く不動であらねばならない。心の奥底に於てはこのやうに無關心であらねばならない。所がエックハルトはまた、人間はそのなす所を、餘蘊なき關心をもち、全面的な「獻身」を以て行ふべきだとも言

つてゐる。彼は言ふ。「率直な全的な獻身はすべての德に勝る德である。これなくしては取るに足るべき作品は生れない。いかに些細な見榮えのしない仕事であつても、之を獻身的に行へば彌撒を讀んだり聽いたり、祈禱を捧げたり、默禱をしたりなどするよりも有益である。試みに最も卑しむべき仕事に從事せよ。汝の心からの獻身がこの仕事に品位を添へ、その價値を高めるであらう。獻身こそはいかなる場合にも仕事に最後の完成を與へるものである。獻身は決して事を誤ることがない」。この言葉は先に述べた所と矛盾しないであらうか。全く不動でありながら全面的な動であり、全く無關心でありながら徹底的な獻身なのである。兩者はいかにして調和し得るであらうか。不動な獻身、不動な關心……どうも腑に落ちないことではないか。先づ心が死に盡していなければならない。餘蘊なく而もいまこの場で死に盡していなければならない。さういつたことが實現出來れば、不動と獻身、卽ち仕事に全く左右せられないといふことと仕事に全的に己れ

を捧げてゐることが忽然として一如となるのである。

然らば死に盡してしまつた心とはどんなものであらうか。「己れ自身のために何物をも欲しない心」(Ein Herz, das nichts für sich will) とはどんなものであらうか。《何だ、そんなものなら解り切つたことではないか。》と思ふかも知れない。果してさうであらうか。實はこれ程難しいことはないのだ。成程さういつた萌しは我々自身も經驗したことがあり、さういつたことは多少理解出來るでもあらうけれども、そこに種々の段階がある。エックハルトが謂ふ所の「練達の士」(der Geübte) は己れ自身がそれであるが故に這般の消息を解するであらう。それとは何か。「解脱の心」(das ledige Gemüt) である。解脱の心は「一切の事物を驅使する力」を具へてゐると言ふのである。解脱の心は一切の能力を具へて、而も何物にも左右せられない。事物に對する純粋無雜な獻身でありながら、而も事物を全く脱却してゐる。ではこの二つの態度が「解脱の心」の中に融合せられる

のであらうか。否二つの態度は一つなのである。即ち解脱の心なのである。言ひ換へれば「不動の隔絶」(Unbewegliche Abgeschiedenheit)である。これこそはエックハルトの至言である。隔絶とは？　隔絶の對象は？　とエックハルトは問ひ、自ら「これは純粹な無を目指すものである。」と答へてゐる。彼は更に言ふ、「心に充分な構へをもたせるには心が純粹な無の上に立つてゐなければならない。純粹な無にこそ、同時に最高の能力が宿つてゐるのだ」。かういつた言葉を理解するには、特別な經驗が必要である。これを誰が否定するものがあらうか。どれほどの經驗段階と生活段階とがここに含まれ、ここに必要であらうか。或ひはまたこのやうな言葉を豁然と理解するとすれば、それは何といふ大きな悟りであらう。けれども人間は誰でも必ずや一度はかういつたことに心を動かされるであらうし、何人の胸底にも、恐らくはかういつた事への憧れが燃えてゐることであらう。

エックハルトが無を說くとき、彼の求めるものは何であらうか。幾多の人間が特にエックハルトに關して同じ質問を試みるであらう。釋尊の後繼者達も同じやうな質問を試みてゐる。果してそれは同じ意味であらうか。エックハルトの說く所は次の如くである。卽ち人間の魂がその目標に到達すれば魂は無の中へ轉落する。轉落に轉落を續けて底止する所がない。底止する所がないといふ所に魂の底止すべき根底がある。この根底が神性（Gottheit）なのだ。これこそは本質的に神性そのものであり、根底的に同じものである。魂、神性、無、有——卽ち永遠に己れの內より湧き出でては歸り來り、而も逆流することのない無限の生命なのだ。

かういつたことが人間の「經驗」だといふのであらうか。ここに疑惑が生ずる。かういつたものは形而上學的な思辨ではないだらうか。どうしてこんなことが理解出來るといふのだらうか。もとより知性を以て理解することは出來ない。然ら

ばいかにして理解するかについてはエックハルト自身その有名な說敎の一つたる「精神のうちなる貧困について」といふ說敎の末尾に於て解答を與へてゐる。この說敎の末尾とそれに伴ふ解答とを引用して見よう。初期の脫却に比すれば、この悟りは一段と高いものだとこの偉大な達人は說いてゐる。その通りである。「私が神性の中から步み出でたとき、『この世には神といふものが存在するのだ』と、すべての事物が私に告げて吳れた。けれどもこんなことでは、私は幸福にせられる筈がない。それは、かういつた場合には私自身が被造物として把捉せられるからである。これに反して、一切を解脫して神の意志の中に立つのみならず、このやうな神の意志からも、將又神の意志のすべての所產からも、否神そのものからも解脫してしまつた悟りの境地に於ては、私は一切の被造物よりも以上のものであり、神でもなければ被造物でもない。私は現在に於ても、將又未來永劫にも、私が過去に於てあり未來に於てあるであらう所のものである。このやうな境地に於

て、私は、私自身をすべての天使にも立ち勝るものたらしめるやうな衝擊を受けるのである。この衝擊によつて、最早神すらも私を滿足させることが出來ない程の富める者となる。神の神たる所以を以てしても、一切の神的な業を以てしても、最早神は私を滿足させない。そは、この悟りによつて私は、私と神とがともどもにもつ本然の姿を得るが故である。私は私が過去に於てあつた所のものであり、これ以上增減することはない。何となれば私は一切の事物を動かす不動な存在であるからである。ここに於ては最早神が人間の内に宿るべき餘地はない。蓋し貧困を通じて人間が己れの永遠にありし姿、己れの永遠にあるであらう姿を得てゐるが故である」。エックハルトは更に右の言を結んで言ふ。「右の說話を理解し得ない者は、これを理解しようとして心を煩はすには及ばない。この眞理に耐へ得るだけの人間となつてゐない限り、換言すれば『この眞理に匹敵してゐない』限りは、右の說話を理解し得ないであらうが故である。蓋し右の說話は神の心から

——直接に——出で來たつた、思索に依らぬ眞理だからである」。

されば直接の經驗なのである。《それは成程さうだらう。だからこそ『神祕主義』といふのだ。》といふ人も尠くないであらう。《人間の感情が超自然的な認識に醉ひ痴れてゐるのだから、わけが解らない筈なのだ。かういつた認識を主張するのは少數者の獨りよがりな特權なのだ。》とかういふであらう。

だがさうではないのである。

四　理解の妨げとなる「神祕主義」のレッテル

マイステル・エックハルトは「神祕主義者」である、とさう言はれてゐる。智識を藏つて置く戶棚の分類としては、事實その通りで差支へなからう。だが抽斗といふものはその中に藏つて置くものにとつては安息の場所であり、隱れ家であ

る。神祕主義といふ抽斗も亦マイステル・エックハルトにとつては、このやうな安息所乃至は隱れ家に過ぎない。ましてやこの抽斗の中にありとあらゆるものが雜然と藏ひ込まれ、その中に混つて途方もないやうなものまでも藏はれてゐるから、「神祕主義」の抽斗と言へば大抵はそんな途方もないものの方を思ひ浮べる虞れがある。かくてはマイステル・エックハルトの獨特な點は、寧ろ全く隱されてしまつて「神祕主義」などといふ學者ぶつた概念の抽斗そのものが始末の惡い邪魔物となるのである。のみならず「神祕主義」のレッテルを貼つた抽斗に記した說明書きが、エックハルトにとつては餘りにも狹隘に失する憾みのある點から見ても、右の事は肯けよう。それは「魂と神との一體的經驗についての敍述」といふ見出しである。成程それはその通りであり、かういつた一體性を見出すことが神祕主義なるものの神髓に含まれてはゐるけれども、マイステル・エックハルトの神祕主義の表題としては餘りにも狹過ぎるのである。だがそれは何故であらう

か。

右のやうな神祕主義の概念は、啻にエックハルトにとつて狹過ぎるだけではない。このやうな概念を以てすれば、人間の宗教的な生活が神の信仰を土臺とし、而もその神が「遠く離れた」神、言ひ換へれば一應人間とは懸け離れた神である場合にのみ神祕主義といふものがあり得ることになるからである。魂と神とが全く別個なもの乃至は一應互ひに「懸け離れた」ものであるといふことを出發點とするのでなければ、魂と神との一體性といふやうな言説は意味をもたないことになるであらう。だがこれこそエックハルトの所説とは徹頭徹尾眞反對なものなのである。否寧ろ生れながらにして魂と一體をなす「神性」、「魂の本質」に他ならぬ「神性」、このやうな「神性」より生れ出づる人間の本然的な存在といふことがエックハルトの神祕主義の基礎であり、目標である。このやうな本質が魂の本質たる所以のものは、神と人間との對立を超えてゐるといふ點に他ならない。神性

といふ代りに無、有、絕對者、本質といふことも出來る。このやうな意味に於ける神祕主義は、神と人間（及び世界）との一體性といふ奇蹟の中から生れ出づる本然的な存在の自覺である。このやうな一體性は、從つて人間によつて初めて「造り出される」ものではなく、「豁然たる悟り」によつて到達せられるものである。それは通常我々の生活に見られる反本質的な分離を脫却する豁然たる悟りである。このエックハルト的な奇蹟と同じやうなものが波羅門敎にも道敎にも佛敎にも見られるのである。

されば基督敎と結びつけて考へられるやうな――否、基督敎と結びつけることが抑〻不當なのであつて、敎會的な神の概念のみについて言ひ得るに過ぎないのであるが――神の概念を拋棄することが、エックハルトを考へる場合第一の先決條件である。けれども右に劣らず重大なもう一つの障害がある。この障害も神祕主義といふものの誤つた概念、而もエックハルトを理解する上から見て誤つた觀

念と關聯したものである。卽ち神祕主義と言へば直ちに「忘我」(Ekstase)といふやうな超自然的な體驗を思ひ浮べるのが常である。この超自然的な體驗は屢〻超自然的な修行や技術や訓練の力を藉りて超自然的な洞察を與へるのみならず、神祕主義者當人としては超自然的な能力を與へられたやうな氣がするのである。神祕主義といふ場合に魂と神との淨福的な融合の體驗の中に、陶醉的に忘我的に融け込んで行くといふやうなことが少くとも考へられてゐる。卽ち人間の到達し得べき至高の狀態であつて、之に比すれば他の一切の生活は價値乏しく、低級にして而も虛しきものであり、また當然かくあらねばならないものである。もとよりエックハルトも、絕對者の中にある魂の大いなる體驗と歡喜とを知らぬわけではないが、このやうな歡喜、一切を融かしてしまふやうな淨福、人間をも世界をも無に歸せしめるこのやうな感情の陶醉は、彼の神祕主義の意義でもなければ目標でもない。否エックハルトはかういつた種類の神祕主義に對しては屢〻峻烈極ま

る言辭を弄してゐる。ここにその一端を示して見よう。

先づエックハルトがどれほどの淨福を以てこの大いなる體驗をなしてゐるかを示すやうな言葉を擧げて見よう。「おお奇蹟に次ぐ奇蹟よ。何といふ高貴な受動的體驗であらう。魂の中核が觀念的にも名目的にも差別の妄想、差別の片影にだに苦しめられることがない。魂は一切の種々相・差別相を脱却して只管一者(das Eine)に信賴するのみである。この一者のうちにあつては、一切の規定と屬性とは失はれ、一つとなつてゐる。この一者が我々人間に淨福を與へるのだ」。さればとてこのやうな感情的體驗が宗敎的體驗の、まして人生の意義であり、目標であると考へる者は全く邪路に陷つたものである。先づ第一に至高の經驗なるものはかういつた「感情的な體驗」とは別物である。エックハルトによれば至高の經驗は「理性的な滿足」であり、「純粹に精神的な過程である。いかに有頂點な場合にも魂の梢は遂に屈することなく、快感に溺れず、毅然として之を超越してゐ

るのである。我々人間の有限なる存在にまつはる感情的な動揺が最早魂の梢を動かすことが出來ないやうな場合に我々は精神的な滿足の狀態にあるのである」。エックハルトはその所論の全篇を通じて、神が孜々營々たる日常生活の中にあることを說いて止まず、神の體驗を何か特別な時に求めようとすることに反對してゐる、例へば「竈の邊りや廐の中よりは、沈潛と祈り、融合的な感情と特別な信心の時にこそ、神を捉へてゐるのだなどと考へる者は、言つてみれば神を引つ摑まへて、その頭から外套を被せ、腰掛の下に突つ込んでしまふやうなものだ。」といふやうな素晴しい表現を用ひてゐる。或ひはまた「絶えず氣分を求め、大いなる體驗を求め、かうした具合のよい側面だけを得たいなどといふ人は、要するに我執そのものに他ならない。」とも言つてゐる。神祕主義を感情的な陶醉だなどと考へるほど、神祕主義を遠く距ること甚しきはない。神祕主義を愛（エロス）の活動と考へる見方はエックハルトの全く採らざる所である。これこそは彼の神祕主義がプロ

ティーンやその他の神祕主義者とも根本的に異る點である。魂と神との一體性は、魂の本來的な自然狀態であり魂の最も根源的な健かな姿である。我々がこのやうな一體性を見失つてゐる所以のものは、之を特殊な例外狀態に歸し、この例外狀態を何等か人爲的に招來し、從つてこの例外狀態と日常生活及びその一切の義務との間には何の橋渡しもないものだと考へるが故である。眞の一體性は寧ろ日常の力強い生活とその活動の中に現はれるものであつて、興奮し切つた模糊とした感情的な陶醉などのない、情操の豐かな明るい認識の基礎の上に成り立つものである。だがここに言ふ認識とはいかなる認識であらうか。謂ふまでもなく、それは特別な認識である。それは科學的・哲學的・形而上學的な認識ではない。もとより形而上學も哲學も科學もこのやうな認識から得る所が尠くないのみならず、今後益〻得る所が大となるではあらう。けれども、兎も角これは獨特な認識なのである。けれどもこの點にまた神祕主義といふ概念にまつはる第三の危險な契機

がある。それは特殊な「認識の源泉」といふ意味から、神祕主義といふものの中に、何か「奇蹟的」認識といつたやうなものを求めようとする點にあるのである。

だが事實はそんなものではない。エックハルトの敎說全體は、人格的・個性的な神の經驗の記錄ではあるけれども、エックハルトの敎說全體の中に見られる所は、決して「個人的」な經驗、卽ちエックハルトに、而もエックハルトにのみ授けられた啓示乃至は夢幻の記錄ではない。エックハルトは常に己れの經驗を出發點として、單刀直入に人間の魂そのものについて語つてゐるのである。されぱエックハルトにあつては、一切は個性的・超個性的な認識であり、すべての人間の魂に宿る同じ認識なのである。從つてエックハルトの認識は、偶然とか無法則とかいふやうなものでは毛頭ないけれども、その認識の生れ出でた秩序、その認識の指し示す秩序は、時間空間的な思惟を事とする我々人間の知性の論理的な秩序

とは全く異つてゐる。エックハルトの秩序は獨特な秩序である。時間空間的な秩序とは遠く隔たつた生命の秩序である。けれども窮極的な根底を求めようとしてこの地上の自然的な秩序を超脱した何ものかを求めるとすれば、そは未だ全く理解が出來てゐない證據である。否未だ全く迷夢の醒めやらぬ證據である。だがそれは兎も角として、我々人間知性の時間空間的な秩序とは別個な秩序をもつ認識だといふことと、之が依然としてこの時間空間的な世界を超越しないといふことはいかにして調和し得るか。然り。これこそ、他ならぬこの認識の目標なのだ。このことは「未だ練達せざる者」には理解出來ないけれども、「練達の士」はこの奇蹟をありのままの現實の世界のさなかに經驗するのである。他の人間とは打つて變つた獨特な存在と化するやうな一種異樣な狀態に於て初めて經驗するのではない。

だが「練達の士」とはいかなるものであらうか。練達の士が認識によつて到達

する「一體性」、彼の存在の源泉となつてゐる「一體性」とはどんなものであらうか。

五　一體觀

エックハルトの神祕主義は一體觀の讃歌である。練達の士が未だ練達せざる者と異り、目醒めた人間が未だ捉はれた人間と異る所以のものは、その胸中に一體觀の讃歌が鳴り響くはおろか、おのづから一體觀の讃歌となり切つてゐるといふ點にある。だが一體觀とは何といふ味氣ない言葉であるか。他方これと同時に「一體觀」といふことが幾多の民族、幾多の時代の多種多樣な傾向の憧れの的となつてゐたのであつた。ギリシア人の哲學は絶えず「一者」を求めてゐた。歐羅巴的な思索の概念のピラミッドもその歸する所は一者であつた。印度人の存在の

思辨も一者を目指してゐた。釋尊の後繼者達も一者を中心問題として取り擧げてゐた。プロティーンは一者を謳歌した、等、等、等。何れも說く所は一者である。だが同じ一者でも、その意味する所は異つてゐる。而も猶そこに共通なものがある。宛ら火の玉のやうに死を破壞し生を生む力を以て、己れの內に入り來らざるものを悉く喰ひ盡す共通な要素がある。けれども同じ一者を求めるにしてもその求め方が異つてゐる。エックハルトも亦一者の認識、一者の直觀、一者への悟りを要求してゐる。けれどもエックハルトの謂ふ一者とは何であるかといへばこれは曰く、言ひ難しである。否旣にかく訊ねることが誤つてゐるのである。そのわけは、かく訊ねれば一者の何ものであるかを判斷の形によつて對象的に言ひ表はすやうな解答を求めることになるのであるが、一者そのものは、決して、またいかなる事情の下に於ても、何等かの規定を附與することによつて、判斷の形式を以て捉へることの出來るやうな對象ではないが故である。然らばこのやうな一者

とは抑〻どんなものであるのかと問ふならば、ここでも亦依然として、次の如く答へるの一途あるのみである。卽ちエックハルトの所說の理解は、好奇心より生れるものではなく、全人格の憧れより生れるものであり、從つてエックハルトのいふやうな意味での一者の理解も亦、一者への憧れからのみ生れるものである。而もその憧れは、この一者を知らうとする憧れではなく、自らこの一者そのものたらんとする憧れなのである。

「未だ練達せざる者」は、エックハルトのいふやうに、對立の世界に生きてゐる。このやうな人間は、主體として外部の世界から隔てられ、外部の世界によつて左右せられるのみならず、事物相互を對立の姿に於て眺め、形態的・空間的・時間的な事物相互の差異によつて左右せられるのである。「世界はそれ自體の中に對立を藏してゐる。對立とは何か。愛と苦、白と黑である。かういつたものは對立をもつてゐるが。かかるものは本質の內には存しない。」とエックハルトは言

つてゐる。人間も亦おのづから事物の中の事物として己れ自身の內より出でて時間空間の中へ入つて行く時間空間的な生活方向・乃至運動方向をもつてゐる。人間はこのやうな生活方向に於ては多樣性の虜となり、その努力は只管に外的事物の中の外的事物として己れ自身をこの世界の中で時間空間的な手段を以て主張することに向けられてゐる。けれどもこのやうな運動方向に反對する微妙な感情がある。このやうな時間空間的な世界に捉はれた運動方向に反對し、このやうな多樣性が元來實質をもたない無內容なものであるといふことを飜然と悟らうとする衝動乃至叫びが心の奧底から發せられるのである。けれどもかういつたことは、これをいかにして認識したらよいのであらうか。

ここに謂ふ「認識」とはどういふ意味であらうか。この問ひに答へるか否かは、我々が正しい飛躍をなすか否かに懸つてゐる。實にやこれこそは時間空間的な世界と、この世界に屬する對象的な認識形式とを脱却して、おのづから成熟する

「生命」のさなかへ、卽ち徹頭徹尾生命そのものであり生命以外の何物でもない生命のさなかへ躍り込む根本的な飛躍であるが故である。だがかういふことはいかにして爲し得るであらうか。これを爲し得る道は、外界に向けられる探求の眼によつてでなく、人間自身の內へ向けられる魂によつて指し示されるのみである。世界の實相、萬物の實相、我々の實相を知らうと思へば、我々は我々自身の內へ入つて見るより他に道がない。けれども「探求者の態度を以て」我々自身の內へ入つて見ることは許されない。我々自身の內へ入ることによつて我々自身が成熟を遂げ、我々自身の窮極の本然の姿たらんことを努め、全人格的に生れ變らねばならない。このやうに生れ變ることによつて、我々は「認識せられたものと認識するものとが一つのものである。」ことを經驗するのである。このやうな一體性の實現が取りも直さず神の認識である。このやうな「一者」が神の本質である。「神は何等かの量や差別の加はることのない純粹無雜な一者であり、觀念的にも、

名目的にも、差別の妄想、差別の片影にすら苦しめられるやうなものを一切超越し、一切の規定と屬性との失はれたものである」。就中、神は遠いものではない。神は決して「彼方」に考へられるものではない。「愚者どもは『神は彼方にあるが、我々はここにあるのだ。』といふやうな神の見方をせねばならないのだと考へてゐる。だが事實はさうではない。神と私、卽ち我々は認識に於て一つとなつてゐる」。或ひはまた「神は私と同じものである。」とも言つてゐる。

空間と時間の內より發して私を動かす差別的・對立的な一切のものは、「變裝した神性」である。時間と多樣性の中に、就中人間の自我の計畫的・意志的に自發的に行ふ所業の中に、事物と神と私とが一つとなつた一者が「隱れて」ゐる。「けれども魂がこのやうな多樣性を離脫すればするほど、そこに神の國が露現するのである。ここに於ては魂と神性とが一である」。從つて我々の體驗する一切の對立、一切の二律背反は、魂が己れ自身の內に立ち歸る正しい過程の內に止揚

され、全人格的に生れ變る過程の内に消え去るのである。このやうに全人格が生れ變れば、一者の本質はいかなるものであるかといふ問ひも、對象的な立場から提起された問ひに對する判斷的な答へとは全く別な意味に於て解決される。人間が自らを一者となすことによつて一者を行ずるのでなければ、いかに一者を喋々しても、畢竟空虚な言辭に終るであらう。重要な認識にあつては、單に人間の一部の機能を働かせるといふだけでなく、全人格の正しい構へが必要である。「魂が差別相を捉へてゐる限りは、未だ魂が本然の姿に達してゐるとは言へない。」とエックハルトは言つてゐる。正しい認識に到達するか否かは、魂の本然の秩序、卽ちエックハルトの好んで用ひる言葉を藉りれば、魂の純粹無雜によるのである。言ひ換へれば、認識とは純粹無雜なるがままに經驗された生命に他ならない。純粹無雜な境地に於てこそ、萬物卽一なる力が輝き出でるのである。「對立」を知らぬ生命は魂の「登攀」によつて到達せらるべき生命である。一體性の認識

とは魂の新たな生命の中に一體性が實現せられ乃至顯示せられることである。このやうな新たな生命は、謂はば人間の中に一切の時間空間的な捉はれを突き破つて「忽焉として湧き出づる」ものであらねばならない。物みな忽焉として湧き出づる所に値打ちがあるのであるが、忽焉として湧き出でてこそ何事も新たな意味が與へられるのである。

六　本然的存在の認識と救濟の經驗

眞の存在——或ひは之を絕對者と名附けても差支へないが——は正しい判斷によつて捉へられるものではなく、全人格の本質的な生れ變りの過程に於てのみ經驗されるものである。我々が本然的存在の認識を求めるのは、智識慾を滿足させるためではなく、救濟のためである。本然的な存在の中にあるとき、それが取り

も直さず生命の充足なのである。從つて本然的存在がいかなるものであるかといふ問ひは畢竟最も窮極的な問題なのである。言ひ換へれば何等かの意味での認識の問題ではなく、救濟の問題なのである。本然的な存在がいかなるものであるかといふ問ひが救濟といふ意味に於て發せられるといふ點に、知的な立場からの解答と救濟的な立場からの解答との差異がある。それは恰も他人が棍棒で頭を叩かれたといふ話を訊くのと、自ら棍棒で頭を叩かれる體驗を經て生れ變つた人間になるのとの差異と同樣である。

一切の規定を超え一切の二律背反を超克した「超對立的」な存在について徒らに講壇的な言辭を弄する者がある。かういつた輩は超對立的な存在が論理的な態度を以てしては到達出來ず、ましてや現實にこれを經驗することが出來ないとは知つてゐながら、自らは正しい態度を執ることも出來ないのみか、このやうな存在を求めようとする正しい態度すら執れないのである。かういつた人間は謂はば

精神のトリックを用ひて、對象的な主客對立の態度と一切の論理的な對立とを暫し脫却し、一瞬「無」の存する狀態を一時的に經驗するのである。彼等はこのやうな狀態を心地よいものとして（また事實心地よいものであるが）記憶の中に留めて置くのみならず、超對立的な境地について喋々するたびに、恰もかういつた境地を本格的に經驗したことがあると言はんばかりに、右の記憶の中に藏つてある狀態を出發點とするのである。もう二度とかういつた經驗を繰り返すこともなく、ましてやかういつた經驗を深めることもない癖に、その後も相變らずこの經驗を云々し續けるのである。かういつた徒輩は僞善的な豫言者である。凡そ進步の止つてしまつた人間である。否、止つてゐるといふことがあり得ない以上、一たび到達した或る程度の水準から下落してしまつたわけである。眞に悟りの境地に達した人はいふまでもなく、眞の求道者でさへも、かういつた輩を看破することは容易である。それはかういつた連中には、人格的な閃きといふものが見られず、

どことなく萎縮したり、常規を逸したりしたやうな點が感ぜられるからである。何れにせよ、刀に譬へれば彼等は鈍刀であり、彼等からは何の力も湧き出でず、滾々たる泉の觀がない。これに反して眞に悟りの域に達した人間は、或ひは絶えず意想外な行爲に出るとしても、徒らに常規を逸した所がなく、或ひは控へ目であつても決して萎縮した所がない。落着があり、人格の光りがあり、暢びやかさがあり、恰も暖かな泉の如くである。彼等の周圍には貴い生命の生ひ立ちが見られ、生命が自由自在に解放せられて己れを發揮するのであるが、これに反して下劣な執着的な人間は、かういつた人物に遭遇すれば、己れの內を見透かされたやうな壓迫感を覺えるのである。

されぱエックハルトの說く根本認識は救濟の認識である。從つて彼の用ひてゐる科學的・哲學的・形而上學的な概念や表現は、謂はば之をその生れ出でた根源へ引き戾し、飜譯し直して考へねばならない。このやうな根源を端的に表現して

ゐるといふやうな意味に於ては、エックハルトの通俗的で譬喩的な言說や說敎の方が、その學者的な著述よりも遙かに優れてゐる。學者的な著述は、通俗的・譬喩的な言說と說敎に基づいて、初めて之を充分に理解することが出來るのである。形而上學的な立場から、從つて依然として「認識的」な立場から、超對立的な存在と目されるものは、エックハルトによつて例へば「無」(Nichts)、「靜かな曠野」(stille Wüste)、「奈落」(Abgrund)、「本質」(Wesen)、「神性」(Gottheit)(神〔Gott〕とは別物である)といふやうな種々な概念を以て言ひ表はされてゐるが、かういつたものは、之を客觀的に理解しようとする態度を以て臨む限りは、理解することが出來ない。それは徒らなる言辭の羅列である。己れ自身に立ち歸り、然る後に初めて己れ自身の內から世界へ眼を向ける自己自身の魂の相關概念といふやうな意味に右の種々な表現を解し、更に進んでは之をこのやうな魂の自己理解の形式と解することの出來るやうな人、換言すれば、かういつた表現を「概念

的に理解」しようとするのでなく、之を自ら「行じ」、乃至は「體現」することの出來る人にして初めて、眞に之を捉へたものと言ひ得るのである。けれどもこのことは、救濟の意志が眞に己れ自身の意志となつてこそ、爲し得ることとである。「救濟」といつても種々な意味がある。例へば生活からの救濟といふやうな場合もあらう。エックハルトの意味する救濟は生活への救濟、正しい生活への救濟なのである。地上のこの生活をそのまま正しい生活として生き得るやうな意味に於て正しい生活を與へられた人間のみが、救濟を經驗するのである。かういつた正しい生活には、他の人間が彼岸の世界に移して考へるやうなものの溢るるばかりの素晴しさも、或ひはまた神慮に適つた地球の建設も含まれてゐる。けれどもこの點については後に說くこととしよう。

形而上學的な概念ならぬ救濟的な概念としての「一體性」とは、いかなるものであらうか。この問ひに答へるものとしては、エックハルトの神祕的な世界には

三つの根本的な概念がある。これらは何れも救濟の經驗の條件と形式とを悉く含んでゐる。否、エックハルトに於ては萬事がその通りである。どこを捉へても、結局同じであるから、どの概念を捉へても彼の教説のどの側面を指摘してもかまはないわけである。さてこの三つの根本概念とは「落着」、「貧困」、「隔絶」である。

七　落着、貧困、隔絶

(Gelassenheit, Armut, Abgeschiedenheit)

これらの概念は何れも救濟の全貌を示すものである。そは己れ自身に立ち歸つた魂の創造的な自由の平和である。

落着とはいかなる意味であらうか。安息である。けれどもそれは最早何事をも

爲し得ない厚顔無知なる者の安息ではなく、最早何等欲する所なき貧困の安息であり、最早何ものをも必要としない充實の安息である。而も貧困の安息と充實の安息とは二にして一である。

落着とはすべての事物を落とすこと、即ち脱落せしめてしまつたことである。就中己れ自身を脫落せしめたことである。平和が己れの心の中に入り來らざる唯一の原因は我執にある。換言すれば、個我を脫落せしめることが出來ないといふ點にある。平和を得んがために世界を逃れ、外部的な靜けさへ赴く者は「それがいかに素晴しく見えようとも、それは虛しきものであり、平和はあり得ない。徒らに迷路に深入りするのみである」。「先づ己れ自身を脫落せしめよ。然らばおのづから萬物を脫落せしめたこととなるであらう」。己れ自身を徹底的に抛棄せねばならない。個我の抛棄に於て全人格の生れ變りが行はれるのである。「何を爲すかといふことよりも、いかなる人間であるかが問題なのだ。」とエックハルトは

言つてゐる。平和の光に滿ちた落着こそは、生れ變つた本然的な存在の表現であり、この存在の中心は最早個我ではなくて神である。人間は最早何ものにも動ずることがない。何となれば動ずべき場所、卽ち個我が最早存しないが故である。我執の存する限り、我々はこの世に種々の妨げを經驗するのであるが、我々の内にただ神の働きのみがあれば、神は同時に世界となり、或ひはこれを言ひ換へれば世界はその神的な意味に從つて我々の眼に映ずるのである。雜沓のさなかにありながら雜沓に動かされることがない。我々は最早安息を求めない。それは動搖の起り得べき點を脫落せしめてゐるが故に、最早何等の動搖をもたないが故である。否、我々は平和をすら求めない。我々自身が人間として「平和」と呼ぶ所のものとなつてゐるが故である。すべてのものを脫落せしめ、就中己れ自身を全的に神に委ねてしまへば、人間はすべてのものを支配し、神をも支配する力を得るのである。この一見いかにも法外な主張を、エックハルトはその隔絕に關する敎說と

關聯せしめてゐる。

隔絶。平和をもたないといふことは、人間が過去と現在と未來、喜びと悲しみ、個我と世界、魂と神との間を彷徨してゐるといふことである。かういつたことが止めば、魂は平和を得、魂そのものが平和となるのである。かういつたものが達成された德性を「隔絶」といふのである。ありとあらゆる事物を眞に完全に脱却した魂は、隔絶の狀態にあるのである。眞に何等の定形をもたず、一切の形象を脱却し、全く空虛であることの出來る精神は、「神の神髓をおのが物となし」、「神をも己れに屈せしめる」のである。これよりもつと解り易い表現を用ひた個所もある。「眞の隔絶とは、愛であらうと、苦であらうと、名譽であらうと、恥辱であらうと、精神の經驗するいかなるものにも動せざること、恰も泰山の微風に動せざるが如くである」。「完全な隔絶に達した人間は永遠の世界へ移されてゐるのであるから、無常なるものによつて動搖を感じさせられることがない」。「完全な

隔絶と無との間には差別がない」。言ひ換へれば完全に隔絶した者にあつては、一切のものがその根源に立ち歸り、その本質の單一の姿に立ち歸つてゐるのである。されぱまたエックハルトは言つてゐる。「隔絶は人間を純粹無雜ならしめ、純粹無雜から更に進んで單純ならしめ、更に轉じて不變ならしめるものであるが、このやうな特性が神と人間に同じ姿を與へるのである」。「隔絶の境地にあつては、人間は神と同じ姿である」。同じ姿とは「一つのものに融け合つてゐることである」。卽ちさうなれば神もなければ人もないのである。

右に述べたやうなエックハルトの言葉は、決して「彼岸」に關したものではない。この現實の世界に於て到達乃至は少くとも接近すべき人間の狀態に關した言葉である。これは苟くも一點の疑ひを容れない自明な生活經驗の表現として述べられてゐるのであるから、エックハルトは何等の躊躇もなくかういつた生活經驗がいかなる人間にも妥當するものだと考へてゐる。けれども彼の有名な貧困につ

いての說敎の中に見られる目醒めた魂の平和についての敎へこそは、最も雄大なものである。この說敎の末尾は先に引用して置いた通りである。

貧困。ここに重要なものとせられる「貧困」とはいかなるものであらうか。外部的な事物に左右せられない態度の表はれとしての外部的な意味での貧困は、もとより褒むべきことではあるが、ここで問題としてゐる貧困はそれではない。エックハルトは言つてゐる、「貧しい人間とは何ものをも欲しない人、何事をも知らない人、何ものをももたない人である」。けれどもその意味する所はエックハルト自身も言つてゐるやうに、「汝等自身の生活が私の說く眞理に合致してゐなければならない。それでなければ私の言を理解することは出來ないであらう」。一見何ものをも欲せざるが如くして、その實外部的な贖罪行爲や苦行によつて依然として個我に執着し、神聖ならんがためにかかる行爲を爲すやうな人間を、エックハルトは激しい嘲笑を以て痛罵してゐる。「このやうな人間は外に現はれた姿か

ら見れば神聖と呼ばれるでもあらうが內から見れば何一つ理解してゐない愚者なのである」。「我意を克服するだけの心構へが出來、『人間といふものは斷じておのが意志に屈すべきではなく、神の意志に從ふやうにすべきだ。』などと主張する人間」についても同じことが言ひ得る。「かういつた人間も亦（心掛けは惡くないにしても）愚者である。縱しんば神の意志に適はうとする意志であるにせよ、兎も角何ものかへ意志を向けてゐる間は、人間は未だ肝心な貧困を得てゐないのである」。眞の貧困の中にある者は、神をすら超越した境地にある人間である。それは己れがこの世に生み出される以前にあつた境地である。ここに於ては、人間は神をも萬物をも脫却してゐたのであつた。神と呼ばれるものは、私が私の根源狀態から步み出て、人間としての存在を得るに至つてから初めて生じたものである。ここに於て突如として私は神をもつに至つたのである。私が——從つてまた同樣にすべての人間が——神性てふ根源狀態から步み出ることによつて、私とと

もに神が造られたのである。私は神とは別個なものとして、神の中に對象的に私自身の本質を意識するのであるが、併し私自身の本質に於ては、私は永遠に神的深淵と一體となつてゐる。これこそは私が萬物をも人間性をも神をも脱却した境地なのである。けれども私が未だ神の意志に從はうと欲してゐる間は、神的深淵と一體となつてはゐないのである。神の意志に從はうといふことは謂はば發端に過ぎない。本來神と一體なる私自身の本質に從つて神と一つに融け合つてこそ、初めて最早何等欲する所のない至高の貧困に在るのである。

眞の貧困、「この上なく純粹」な貧困は「何事をも知らない」人間のものである。これも亦同樣の意味である。苟くも何等か對象的なものの面影をもつものが、對象的なものとして人間の心を動かす限り、そは人間から貧困といふ德性を奪ふのである。眞の貧困にあつては、神といふ觀念さへも姿を沒してゐるのである。

「未だ人間が神の永遠の樣相の中にあつたとき、人間のうちには未だ他者は存し

なかつた。人間のうちに生きてゐたものは悉く人間自らであつた」。されば眞の貧困にあつては神も亦心のうちから餘燼を止めず姿を消してしまつてゐるのである。かく言へば一切の對象的なるものを拋棄せよといふ要求を餘りにも極端に突きつめた感がないでもなからう。人間が人間である以上、對象的な關聯のうちにしか存在することが出來ないのであるから、一切の對象的なものを離脫したとすれば、最早人間として何ものも殘らないのではないか。かういつた疑問に對してマイステル・エックハルトは、恐らくかう答へるだらう。《救ひ難い愚者よ。汝は未だ何一つ解つてはゐないのだ。私は何も汝の對象的な認識を頭ごなしに攻擊してゐるのではない》。すると論者は重ねて問ふであらう。《でも先生は今しがた、神をもお認めにならなかつたではありませんか》。《それはその通りだ。》とエックハルトは言ふだらう。《我々の論じてゐるのは問題が別なのだ。汝のさういつた質問そのものが、汝が未だ古い水準に止つてゐることを示すのだ。汝は未だ飛

躍をしてゐないのだ。人間の足場とすべき乃至は足場とすべからざる境地について語つてゐるのだといふことを汝は氣附かないのだ。人間の生きて行く足場は一切のものを超越してゐなければならない。その足場のあるべき境地は、「成程認識と愛との生れ出づる境地ではあるが、自らは愛もせねば認識もしない境地なのだ」。》

さて「何ものをももたない」人間とはいかなるものであらうか。それは地上の外物をもたないとか、多くもつてゐるとかいふやうなことではない。外物をもつとかもたないとかいふこととは全く無關係な、何ものをももたない貧困なのである。否世人が說くやうに(而してエックハルトも亦屢〻說く所であるが)、我が心の全域が神を受け容れるやうに、すつかり開け放たれてあらんがために、出來る限り何ものをももたないやうにせねばならない。否これすらも窮極の眞理ではない。人間が抑〻神を受け容れる場所であり得る限りは、人間のうちに差別的なものがあ

る。否人間自身が未だ「差別的なもの」なのである。人間が神を受け容れる「場所」であり、從つて神とは別個なものであるといふことを超越するに至つてこそ、初めて人間は自我と神との對立を超越し、眞に無の中の無、本質の中の本質となり、人間の魂は完全な貧困の中にあり、從つて一者の「中」にあり、平和をもつのみならず、自ら平和そのものとなり、かくして自ら一者となつてゐる。即ち魂がその根源に於て永遠にある所の本然の姿となつてゐるが故である。ここに謂ふ「ある」とは？　この「ある」といふ言葉は、一體何を意味するのであらうか。論理的な連辭であらうか。同一判斷であらうか。否、この言葉は別な意味に解すべきである。或るエックハルトの偉大な理解者が言つたやうに、神祕的な連辭と解すべきである。《魂は一者「である」。》といふ命題は、《魂は一者「である」。》といふ判斷を意味するものでもなければ、さればとてこの命題は他動的乃至は自動的な意味をもつものでもなく、寧ろさういつたことを超越した全く別な意味をもつ

てゐる、卽ちこの命題は、魂が一者として「本質顯現する」といふ意味である。落着・隔絶・貧困、この三者は畢竟その意味する所は同じである。卽ち己れに立ち歸つた魂を意味するのである。己れに立ち歸つたとは、先に述べたやうに、絕對的な空虛な狀態、窮極的な不動、完全な暗黑狀態である。果してさうであらうか。否、寧ろその反對だと言はねばならないのだ。果して「空虛」であらうか。否、充實なのだ。果して「暗黑」であらうか。否、燦然たる光輝なのだ。果して「不動」であらうか。否、永遠の動である。

これはどう理解したらよいのであらうか。何といふ矛盾であらう。どう理解したらよいのかつて？　理解など出來るものではない。唯々それを生きて行くだけだ。

落着、隔絶、貧困のある所には神がある。だがエックハルトの謂ふ神とは、いかなるものであらうか。この重要な問題を考へるには、冒頭に繰返し述べた所に思ひを潛めねばならない。

八 神

マイステル・エックハルトを理解するには、心の內面的な成熟乃至は憧れを必要とする。好奇心のみを以てしてはエックハルトの眞理を明かにすることは出來ない。單に頭腦を以て問ふのでなく、心の奧底から全身是求道者となればなるほど、エックハルトの眞理が悟られるのである。同時に我我自身の生活及び之に伴ふ苦惱を回避することなく、生活の意義を求め、そこに神的なるものを感ずるが故に、生活をうべなふのでなければこの眞理を悟ることは出來ない。このやうな神的なものが我々の內面に咲き出で生活の中に顯現せら

れ、我々自身を通して展開せられるといふことこそ我々の憧れであらねばならない。このやうな憧れを眞におのが憧れとして身内に感ずる者のみが、エックハルトを理解することが出來る。而も人間がこの憧れを實現するだけの成熟を遂げてゐればゐるほどその理解もそれだけ深いのである。けれども大いなる眞理を經驗し、その經驗によつて生れ變り、かくして神性が我々人間を通じて働くやうになるには、我々は先づ世界に對しても、己れ自身に對しても、死に盡してゐなければならない。卽ち一切のもの、就中我々自身を脫落せしめてゐなければならない。だが一切のもの、否我々自身をすら脫落せしめて、而も生活をうべなふとはいかなることであらうか。

「生活」乃至「生」といふ言葉には、二種の意味がある。生活といふものを皮相的に單に時間空間的な生活と解するか、それともこの時間空間的な生死の中に高次の生命の展開を經驗するかによつて、その意味する所が異つて來る。時間空

間的な存在が何等かの意味に於て己れ自身を脱却しようとする限り、この時間空間的な存在を徹底的に克服してこそ、初めてこのやうな高次の生命を經驗するのである。蓋し我々人間は、人間として二重の拘束を受けてゐる。一はこのやうな時間空間的な存在から受ける拘束である。ここにあつては我々の生活は「時間の中」に生れ、「時間の中」に潰え去ることを免れない。他は時間空間を超えた存在から受ける拘束である。ここにあつては我々は永遠の昔から生れてゐたのであり、決して潰え去ることのない生命をもつのである。而して人間の時間空間的な生活は時間空間を超えた存在の、永遠に變り行く表現である。我々は我々の魂によつてこのやうな時間空間を超えた存在と結ばれてゐる。そは魂の本質そのものがこの高次の存在なるが故である。けれどもこのやうな場合には「存在」といふ言葉を用ひない方がよい。「存在」といふ言葉を用ひると、兎もすればこれを非存在と對比させることになるが、このやうな場合、このやうな對比は全く許され

ないのである。ここでは寧ろ絶對者とか、神性（神性といふのは單に「神」といふよりも深い意味である）とか、或ひはあつさり本質とかいふ言葉を用ひた方がよい。さて己れの「足場」を專らこの本質卽ち神性の中におき、他へ移さないといふ要求が人間に課せられてゐる。これは取りも直さず人間がその魂の奧底なる本然の姿となれといふことである。だがかくなるためには、時間空間的な世界に於ける魂の一切の絆、就中おのが個我を拋棄せねばならない。このやうな個我あればこそ、抑〻人間にとつて場所の遠近や時の前後があり、人間の心を「動かす」數知れぬ執着や葛藤があるのである。「中核を得んがためには、このやうな個我の外殼を打ち碎かねばならない。」とエックハルトは言つてゐる。これを能く爲し得る者は「落着」があり、「隔絕」の境地にあり、一切を逃れて「空虛」である。けれどもこのやうな隔絕の內より發して更に時間空間的な生活をもうべなひ、事業を喜ぶ力强い生活を生きねばならない。このやうな生活は、喜びも苦しみもなけ

れば、對象的な想念も對立的な想念もないやうな生活では斷じてない。この點では日常茶飯の生活と何等異らない。けれどもこのやうな生活は、生活全體として高められた、別な意味の罩つた生活である。「世界を脱却して『空虚』となつた人間は、最早神と隔つべき何ものもない。」とエックハルトは言つてゐる。かくしてこのやうな人間は、謂はば神と渾然一體となるのであるが、これは全く必然的な過程である。何となれば完全な純一無雜こそ、神にとつて自然な、最も固有な場所であるが故である。「されば神は隔絶した心にのみ己れを授けることが出來る」……。

さてこのやうに簡單な敍述によつて、マイステル・エックハルトの教説の大要を示さうとする試みに對して、《寧ろその位なら何も言はない方がましではないか。一つ一つの文章が、一つ一つの言葉が、何と多くの誤解の危險を孕んでゐるではないか。》といふ人もあらう。エックハルトの言葉は讀む傍から既成の圖式

に嵌まり込んでしまつて、その固有の意味を表はすことは難しい。就中「神」といふ言葉に於て然りである。「神」といふ言葉を聞けば、ましてやエックハルトも偉大な基督敎徒であるのだから、直ちに敎會的な神が聯想される。エックハルトは自ら基督敎の敎團の長でありながら、敎會的な神の狹さと遠さとを克服することを以て生涯の鬪ひとなしてゐたなどといふことは、想像出來ないのが當り前であるから、これも無理からぬことである。然らばマイステル・エックハルトの謂ふ神とはどういふ意味であらうか。

神は萬象の中にある。神は無の極地である。神は父である。神は人間なくしては無に等しく、我々人間は神なくしては無に等しい。我々はその本質に於ては神よりも以前にあつたものである。我々は神を克服し、神を脱却せねばならない。けれども我々の努力は飽くまでも神と一體たらんとする努力であらねばならない。……エックハルトが神について語つた所は右のほかにも數多くあるけれども、ど

の場合にも彼の意味する所は全く同じ神である。（我々が之を論理的に理解するのでない限り）かういつた言葉の間には、何等の差別もない。その目標とする所は何れも同じである。けれどもこれがいかなるものであるかは言ひ表はすことが出來ない。それは何等かの意味に於ける「いかなるもの」、「何もの」でもなく、さればとて何等かの意味に於て「何ものでもない」のでもないが故である。然らばいかに理解すべきであらうか。知性からでなく、內面的な經驗から理解せねばならない。けれどもここに求められる經驗を、何等かの命題の形で表はさうとするならば、神は對象的な世界に捉はれた魂にとつては、對象的なものとなり、對象的に眺められ感ぜられる本源的な本質なのだと言はねばなるまい。神は本源的な根基ではあるが、この根基が人間の魂の中に於て、己れ自身を意識した狀態にある場合に、これが神なのである。魂が人間の魂として對象的な關聯の中に存してゐる場合にのみ、魂は「神」をもつのである。（卽ち魂自身の本質をば「神」として有するの

である。）これに反して魂が一切の對象的な存在關聯を脫却して、自ら絕對的な本質へ入り込む場合には、魂にとつて一切の對象性が失はれると共に、神も亦失はれるのである。これこそは魂が「本質」乃至「神性」の中に於て神と融合するといふことと同義である。けれども魂が人間の魂なるが故に、神との融合に先立ち、乃至は神との融合の後に再び對象的に存在するといふやうな場合には、魂はおのが本質のままなる姿、乃至は融合の中に感ぜられた所のものをば未だ「神」としてもつに過ぎず、乃至は再び「神」としてもつに至るのである。魂はかういつたものを豫感・信仰・希望として豫め抱いてゐるのであるが、融合の後には信仰乃至喜ばしい確信として抱くことになるのである。けれども神と一體の境地に至り、ここに於て神そのものまでも消え去つてしまふといふことこそ、我々人間にとつて終始渝ることのない目標なのである。人間はその生活過程に於て、このやうな目標に到達すべき任務を課せられてゐる。また事實このやうな目標は、絕えず新

たな正しい努力によつて到達することも可能ではあるけれども、人間が人間である以上は、對象的・對立的な關聯の中に生きることがその本性なのであるから、一たび到達したこの目標に踏み止まつてゐることは出來ない。從つて人間は幾たびとなく、己れがこの目標への途上にあるに過ぎないことを知るのであるが、このやうな場合には、大いなる「絶對他者」(das Ganz-Andere)として幾たびとなく神を求め、神へ憧れるのである。人間はひとたびこの大いなる經驗を經れば、また同時に神との內面的な一體性の喜ばしい確信を絶えず抱くものだといふことは言ふまでもない。このやうな經驗を經た人間は、おのが魂の神々しさを經驗したのであるから、內面的な高貴の感情に浸り、「崇高な氣持」(hochgestimmt)になつてゐるのである。エックハルトの言々句々には、かうした崇高な氣持が表はれてゐる。けれどもこの崇高な氣持は、專ら人間の最も內奧なる根基の經驗、卽ちエックハルトの所謂神々しい「火花」(Fünklein)の經驗から生れるものであり、

従つてこのやうな崇高な氣持は、それ以外の點に於ては人間を極めて謙虚ならしめるのである。人間は神と深い繫がりをもてばもつ程、益〻崇高な氣持となるのみでなく、他面に於ては益〻謙虚となるのである。このやうな謙虚は無常なるものの中に永遠なるものが表はれ出づる樣相に他ならないと共に、他面に於ては己れ自身をも抛擲する力を具へてをればこそ、無常なるものが永遠なるものの子となるのである。かくして人間は崇高な氣持と同時に、謙虚さをもつことによつて、己れ自身の內奧なる中核の姿を絕えず新たに意識するのである。人間は大いなる體驗の過程に於て、この中核が唯一の眞實な生命の力であることを知るのである。他の一切のものが、この唯一の眞實の內面の力によつて生きるのみならず、人間自身の救濟も亦この力によるものなることがはつきりと感ぜられる。このやうな力をばエックハルトは神と呼ぶのである。

かういつた事の理解出來ない人は、エックハルトに幾多の矛盾を認めるであら

うし、エックハルトが一方に於ては依然として所謂「神樣」(der liebe Gott) に對する基督敎的な幼稚な信仰をそのままもつてゐると共に、他方に於ては(例へば《神は「多樣性を脫却した存在」である》などといふやうな)、何等固有な經驗に裏附けられてゐない形而上的な思辨を烏滸がましくも弄んでゐるのだなどと言ひかねないであらう。それこそ飛んでもない思ひ違ひである。無理解な人間には形而上的な思辨としか思はれないやうなものが、その實寧ろエックハルトの最も深い經驗に根ざしたものである。それは魂をも神をも超えて、神性の靜けさを指し示す本質の中にあつて、魂と萬象とが一體となつてゐるといふ經驗である。他ならぬこのやうな經驗は、また同時に素樸な神の信仰の根底でもある。エックハルトのこのやうな「素樸」な信仰、卽ち父たる神を口にする信仰が右のやうな最も深い經驗——神の本質と魂の本質とが同じ本質となつてゐる經驗——の根底の上に立つてゐればこそ、このやうな素樸な神は敎會の說く神とは相容れないのである。敎會

の立場からは、神は人間を遠く離れた冷たい造物主たる神、怖しい神と考へられ、人間が救濟を得るのには、どうしても教會がその仲介者とならねばならない。エックハルトにとつては神には何等「怖るべきもの」はない。神に具はるすべてのものは愛すべきもののみである。一切の拘束と執着とを突き破らうとする人間は、安息と平和とを與へるこの力を自ら經驗し、「樣相なきもの」(das Weiselose)の大いなる惠み深き力を感ずるのである。人間は自らが弱い者であるが故に、この力に對して神と呼びかけ、萬象の本質として人間自ら經驗するこの力に對して、人間自らが非本質的なるが故に、神と呼びかけ、大いなる平和として人間自ら感ずるこの力に、人間自身が平和をもたざるが故に、神と呼びかけるのである。己れの最も深い經驗の中から生れた救濟の確信を、日常生活の中へ持ち込むとき、この確信の感情が神への信頼となり、この經驗の根底に絶えず己れの足場を置きたいといふ憧れから、人間はこの唯一なる力に己れを全的に委ね、心の奥底から

《私は神を信ずる。》と叫ぶのである。

かういつた神が幼稚な人間にとつての神であらうか。未だ「目醒めざる者」、「未だ練達せざる者」のための神に過ぎないのであらうか。魂が神と一體となれば神は消えてしまふものだといふことを悟り得た人間にとつては、このやうな神は最早現實性をもたないのであらうか。かく主張する人間は、おのが經驗の地盤を缺くか、それでなければこのやうな地盤を離れて論理的な推理といふ欺瞞的な地盤へ陷つてしまつた者である。成程人間は魂の根基に於ては、神と一つになつてゐる。而して人間がこのやうな根基へ向つて突き進んでゐる限りは、「對象」としての神をも脫却してゐるけれども、實際に人間がこのやうな根基へ突き進んでゐるといふことは、人間の正常な狀態ではなく、練達の士にとつてすら、このやうな狀態は持續的な狀態ではあり得ないといふことこそ、人間の現實の姿なのである。從つて「神」なるものは、魂がその根基へ突き進むよりも以前の段階に存在する

のみでなく、魂がその根基に突き進んだ後にも別な意味に於て存在するのである。自ら一者と化した人間、卽ち萬象を脫却するとともに神をも脫却し、神ならぬ一者たる神性を經驗し得た人間は、再び對象的な關聯の中に生きるに當つて、非對象的に經驗された神性を無限の感謝と愛と無邪氣な信賴とを以て、おのが神として追憶し尊敬し愛しもするであらう。彼は、己れをも包攝する全一的なものとして神を愛するであらう。人間が己れ自身を人格的な存在として體驗すると同樣に、己れの魂の中に經驗されるこの根源的な力、一切のものを包攝するこの根源的な力をも人格的な存在と感じ得るといふことは當然である。而してこの大いなる存在に引き較べて、己れのうちに働くこの存在の部分的な表現として人間自らは子のやうに感じ、全幅の信賴を傾けて之を「我が父」(mein Vater) と呼ぶのである。勿論大いなる體驗の人間に對する働きかけは、他の形式をとつて現はれることもある。だが何れにせよ、「神」とか「父」とかいふ言葉を口にすることが自分の胸

にしつくりとしないやうな人は、エックハルトの謂ふ「神」なるものも、對立に滿ちた對象の世界を突き拔けて經驗せられる超對象的・超對立的な、樣相をもたない一者(das übergegenständliche und übergegensätzliche Weise-lose Eine)を對象的に把握するための概念なのだといふことを考へて頂きたい。エックハルトを理解しようと思へば、エックハルト自身のこのやうな根本的な體驗に出來る限り近づくやうに努めねばならない。このやうな根本體驗についてエックハルトは種々異つた言葉を用ひてゐるが、これらの言葉の意味を理解するには、單に字義の解釋によるよりはもつと直接的な道がある。それはエックハルトの說教全般に感ぜられる啓示の音調ともいふべき比類のない氣分に浸るといふことである。我々の心の琴線をこの音調に合せることが出來れば、略〻理解に近づき得たものと言ひ得るのである。

九　エックハルトの「氣分」(Stimmung)

遠く隔たつた人間には、中世の講壇的・敎會的な概念がマイステル・エックハルトの「謎を解く」ことを屢〻困難ならしめるのであるが、兎もすればこのやうな概念の網の中に落ち込んで足掻きがとれなくなつたり、或ひは何等かの敎說を繙くに當つて、秩序整然たる世界觀を求めて見たいといふ思索型の人間の陷り易い誘惑に引つ掛る虞れのある人は、エックハルトの所說全般に通ずる獨特な氣分を率直に受け容れ、この氣分を己れの胸の中に脈打たせるやうにせねばならない。エックハルトの叡智は、この氣分の中に端的に感得せられる。今日に於ても推理的な知性よりも寧ろ感情に信を措かねばならないとすれば、依然として一大決心を必要とするわけである。而も全世界のいづこに於ても、過去幾千年の歷史に耐

へ來つたものは、感情から生れ出で、感情によつて我々に話しかける叡智であつた。これに反して單なる思考の産物は絶えざる變遷に服してゐる。尤もこの變遷の中に進歩が含まれてゐると考へる論者もあるであらう。人間の歩むべき内面の道に觸れるやうな事物にあつては、超時空的な、思考を絶したものの中に正しい足場を置いてゐなければならない。而もこの超時空的な、思考を絶したものの中にこそ、一切の時間空間的な秩序の根底が藏せられてゐるのである。いかなる民族に屬する人間も、いかなる時代に屬する人間も、己れ自身の中にすつかり融け込みながら、而も他方に於て人間的な本性を否定してゐなかつた場合には、時代に制約された眼が魂の内部へ沈潛しようと、綺羅星輝く天空に我を忘れて神を求めようと、齊しく超時空的な、思考を絶したものにまで突き進み得たのであつた。されば内面の道に觸れるやうな著作の中に、眞理の湧き出でる地盤をなす氣分を感ずるだけの能力をもたない人間には、著作全體が絢爛たる修辭に飾られた形而

上的な思辨だと位にしか感ぜられず、他の思辨よりはこの思辨の方がましであるといふ程度にしか感ぜられないであらう。

氣分とはいかなるものであらうか。もとより氣分そのものがいかなるものであるかを敍述することは出來ない。氣分なるものがもつ性格を多少の言詮を用ひて指摘し得るだけである。エックハルトの所說には力の罩つた靜けさが漲り、大いなる生命の溫かみが溢れ、生をうべなふ喜ばしい響きと高らかなる躍動とが具はり、莊嚴な獨自の輝きに滿ちてゐる。獨特な生命の光りが比類のない溫かみと結びつき、魂の崇高な氣分が日常生活の直接さへの喜ばしい身近さと結びついてゐるといふことが、恐らくはエックハルト的な氣分の特徵であらう。けれどもこのやうな溫かみは淚脆い感傷的な憐れみの感情的な溫かみや情愛的な熱情の溫かみといふやうなものではない。それは一切を結び合せる大いなる安息の力の體驗から生れ出る朗かな柔かな明るい溫かみである。この力に包まれるとき、我々は最

早何ものにも動かされることのない根基の中に包攝された思ひがするのである。ここに於ては絶對者への近さが端的に感ぜられ、この近さをば故郷と感じ、結局に於ては二度と離れることの出來ない最も本源的な我が家に安住するの思ひを抱くのである。このやうな温かみは他方に於ては我々の魂をも奪ふやうな溢るるばかりの充實の體驗と結びついてゐる。エックハルトは常に無限の富の湧き出づる温かな泉であるやうに感ぜられる。この泉は或る中心より湧き出でて數限りもない形姿となつて充實せられる。而もこれらの形姿が同じ中心によつて培はれ存在の支柱を與へられながら、絶えずこの中心へ立ち戻つては、之によつて己れを新たにするのである。而もこのやうな豊かさが獨特な輝きに包まれてゐる。そは恰も自ら靜けく、淸らけく、力強く輝く高貴なるものの輝き出でるが如くである。そは己れより發し他の何ものよりも發することなきが故に何ものによつても曇らされることのない輝きである。そは他の光りの反射といふやうなものではなく、

獨自の輝きと獨自の反映として神的なるものの紛ふかたなき表徵たる高貴なる本質の獨特な固有の輝きなのである。而もこの輝きは「王者の心」(das königliche Herz) の崇高さを表はしてゐる。他のものに立ち優る心ではなく、己れよりも低きものをおのづからの如くに己れの水準に引き上げる王者の心の崇高さである。大いなる眞理は理論的に基礎づけ得る所に特徵があるのでなく、溫かみと充實と輝きと崇高さとがその特徵なのだ。だがエックハルトの說く所によれば、一者は無に等しいといふのであつたが、このやうな溫かみや充實や輝きや尊嚴が、無たる一者といかに調和し得るであらうか。

一〇 充實と崇高さとしての「一者」

魂が一切の事物を脫却し、それ自身全く「無」と化したとき、魂と神との一體

性といふ經驗が現はれるのだとエックハルトは說いてゐる。けれどもこのやうに一切の特殊化を否定することが、單に否定的な無を意味するものであるといふやうな甚だしい誤解を避けねばならない。このやうな單に否定的な無は、事物の多樣性の中に己れを見失つた人間の立場から考へた「無」であるに過ぎない。抑々超對立的・超對象的な無差別的な一者は、一切の肯定的なものを缺く意味に於て空虛なのではなく、一切の否定を缺く意味に於て空虛であり、從つて單に何か或るものでないといふのでなく、一にして一切であるが故にある所のものなのである。我々の論理的な概念から見れば、規定が乏しければ乏しいほど、それだけ空虛であると考へられることは言ふまでもない。また我々の論理的な概念のピラミッドのもつ意味を、現實へ移して考へるといふことも當然な行き方である。世界の對象的な把捉及び世界に對する時間・空間的な態度にとつては、このやうな行き方も正しいのである。ここにあつては規定を缺くものが實際に「無」であり、

苟くも何ものかであるものは規定をもつが故に何ものかである。これに反して一擧にして一切の「規定」を脱落せしめ、かくして論理的な思惟と差別的な行爲とその基礎たる對象的な態度とにのみ捉はれた拘泥を脱却するや否や、我々は無規定のものをば無限の充實として經驗し（それは勿論單に思惟するといふだけでなく、實際に經驗するのであるが）、規定を求める人間の立場から見れば無と考へられるものをも無限の充實として經驗すると共に、一切の規定をば無限の充實に加へられる制限として經驗するのである。「何物かが高貴であればある程それは普遍的である。」といふエックハルトの言葉もこのやうな意味である。されば何等規定の存しない所に眞の充實がある。このやうな充實が對象的な立場から見れば空虛であることは言ふまでもない。これに反して一たび一切の對象性を脱却し、而もまどろむことなく、魂の本質顯現する非對象的な根基に足場を置き、而も己れの視力を失ふことのない人間は、充實を經驗するのである。言ひ換へれば、このやうな

經驗は概念的な「構想」ではなく、經驗の事實であり、而も言詮による敍述を絶した事實である。このやうな場合には單なるあれやこれやのものに對しては、隔絶の態度を持するが故に、人間は一切のものをもつはもとより、更に進んで、自ら一切のものなのである。「私があれやこれやである間は、或ひは私があれやこれやをもつてゐる間は、私といふ人間があり、從つて私は一切の事物でもなければ、一切の事物をもつてゐるわけでもない。汝がこれでもあれでもなく、これをもあれをももたないやうに隔絶して見よ。さうすれば汝は至る所にあるのだ。されば汝がこれでもあれでもなければ、一切のものであるのだ。」とエックハルトは言つてゐる。このエックハルトの叫びの中に、歡喜と感激とが罩つてゐることを感ぜねばならない。エックハルトは《このやうな經驗をした人間こそ比類なく素晴しい經驗をしたものといふべきだ。》とでも附け加へたかつたのであらう。「この多樣性に於て我々が外面的にもつ一切のものは、內面に於ては一つであ

る。」と言ひ、更に言葉を續けて「ここにあつては草葉といふ草葉が、木と石とが、すべての事物が、一つである。これこそはこよなく深いものである。この深みの中に私はとろけこんでしまつたのだ（Und darin habe ich mich vernarrt）。」と告白してゐる。このやうな經驗に宿る大いなる奇蹟（Wunder）とこの奇蹟によつて與へられたる魂の陶醉とを、彼は繰返し口にしてゐる。このやうな經驗は、エックハルトにとつては「奇蹟の鏡」（Wunderspiegel）である。「練達の士にとつては、奇蹟の鏡に映じたるが如く、すべての被造物の本質は一つである。」エックハルトはこのやうな經驗によつて、世界のあらゆる事物に與へられる醇化を倦むことなく語つてゐる。魂が一體化を經驗するとき、萬物は謂はば透明となり、萬物を通して輝き出づるもの卽ちその「神的規定」（göttliche Bestimmtheit）によつて壯麗なものとなる。このやうな場合には、一つ一つの事物がそれぞれ特殊な言葉によつて語り出でながら、而もその語り出づる所は同じであり、それぞれ特

殊な形態を通じて唯一つの本質を顯現してゐるのである。この本質はすべての事物の中に働き、而もこの本質によつてすべての事物が抑ゝ何ものかであり得るのである。このやうな本質は、大いなる諧調を生むのである。そはかくしてすべての事物が同じ一つのものの顯現となるが故である。されば事物はその多種多様なるがままに一者を語り出づるのである。

他方この事實によつて、同時に一者の根本體驗に宿る他の側面が示されてゐる。それはこの一者が決して多様性と對立するものでなく、一者自體が多様性の本質だといふことである。それはいかにしてであらうか。先に力説した所とは寧ろ眞反對の結論に到達したことになりはしないだらうか。先には一者を經驗するために魂が多様性を克服せねばならないと說きながら、今や多様性の中に一者を見、多様性をば莊嚴なるものとも呼んでゐるではないか。それはその通りである。だが決して矛盾ではない。多者を一者の顯現として經驗し、一者を多者の根基とし

て經驗するやうな場合には、このやうなことは何等矛盾にはならない。事物がそれ自體として固定し、それ自體に基づく存在を要求するやうな場合にこそ、事物とその多樣性は本質をもたず、從つて克服せらるべきものなのである。されば人間も亦、ただ獨り事物の中の事物として、己れ自身に基づく存在を要求する事物に伍して、己れ自身に基づいて自己を主張せんとする限りに於ては、本質をもたないものとなるのである。これに反して多者として我々の眼に映ずるものは、人間たると事物たるを問はず、その本質に於ては一者の顯現(das Eine in seinem Offenbarwerden)に他ならない。このやうな多者が一者の顯現として經驗される場合には、そは最早多者ではなくして一者である。されば此處には二重のものが表はれてゐる。一者は多樣性に對立したものでありながら、而も同時に多樣性の本質なのだといふことである。多樣性がその本質として一者を顯現してゐる意味に於ては、一者は多樣性であるけれども、多樣性がその根基たる一者に基づかず

して多樣性自身に基づく存在を要求し、多樣性自身に基づいて經驗せられる場合には、一者は多樣性と對立してゐる。

一者を充實として敍述するとき、陶醉とか、感激とか、醇化とか、壯麗なるものの體驗とかいふやうな價値體驗を表はすやうな言葉にいつしか變つて行くといふことは、右に說いた所を見ても知られるであらう。

またエックハルトは一體性の體驗と多樣性の體驗とこの兩者の對立を超克する動きとの三つの契機を一括して、次のやうな比喩によつて言ひ表はしてゐる。「被造物を被造物自體に於て認識するに止まる場合には、この認識は晩の認識である。被造物は單に差別的な姿で見られるだけである。被造物を神に於て認識する場合には、それは曙の光りである。(曙の光りは被造物を醇化し、その共通の本質を露はにするのである。) これに反して魂が神をば唯一の本質たるもの (從つて事物の共通な本質たるとともにその差別相の本質たるもの) として認識する場合には、それは白晝

である。かくして人間は物狂はしいばかりの情熱を以てこれを希求し、本質がかくも高貴なることを見るべきであらう」。(Wenn man die Kreaturen nur in sich erkennt, so ist das ein Abenderkennen. Da sieht man sie lediglich in unterschiedlichen Bildern. So man sie in Gott erkennt, so ist das das Morgenlicht. Erkennt die Seele aber Gott als den, der allein Wesen ist; das ist der lichte Mittag und so sollte der Mensch dieses wie in wahnsinniger Leidenschaft begehren und anschauen, dass das Wesen so edel ist) ここに於てもまた「高貴」(edel) といふ言葉が重きをなしてゐる。人間は己れの魂がその梢に於て、その火花に於て、その本質に於て、いかに「高貴」であるかを認識すべきである。このやうな「一者」の體驗に於て經驗される「崇高なるもの」(das Hohe)、我々の魂の中核たる「高貴なるもの」の感激から一切に漲る崇高な氣分が生れるのである。而して高貴な魂の根基の經驗から生れるこのやうな崇高な氣分の基礎にも、

神意を顯現せしめる動きに對する大いなる認識がある。現實は無であり、神を顯現し一切を包括する生命展開の動きよりほかには現實的なものはないのだといふことこそ、大いなる悟りである。

二　神的生命

隔絶とか、空虛とか、靜けさとか、曠野とか、落着とかいふやうな言葉を耳にするとき、魂といふもののもつ意味の充足される窮極の境地は、一切の生命の沈默であり、少くとも時間空間的な生活及びこの生活に含まれる世間的な充實からの隔絶であると考へられがちである。けれども、事實はさうではない。不動の神性に具はつた無差別的な不變性は、エックハルトにとつては最も高い意味に於ける「生命」と同義である。世界を最も力強く肯定し、世界の中に最も力強く活動

することにこそ、世界からの眞の隔絶が發揮せられる。要は「生命」を正しく理解することに歸するのである。

神性、卽ち一切を包括する世界根基は、エックハルトの見る所によれば、自足(Sich-selber-Genügen)といふことである。この意味に於ては變化をもたない安息である。けれどもそこには自足的な死があるのみでなく、それ自身の動きの中に輝かしさと美しさとを具へた生がある。一者であつて而も一者でないとか、多様性であつて而も多様性でないとかいふやうな對立的な命題の眞の意味が、ここに於て明かとなる。これが内面的な動きであつて、單に時間的乃至論理的な動きではなく、神意を顯現する動きなのだといふことを知り得てこそ、始めてこの命題の意味が充分に理解できるのである。而して特殊化の力によつて神を顯現することの動きにこそ、大いなる美が宿つてゐるのである。エックハルトは或る悟道の域に達した人の「神の本性は美である。」といふ言葉を引用して「私はこの言葉に更

に次のやうに附け加へよう。かくの如く美なるものからは輝きとその反映とが燦然として現はれ出でるのであるが、ここには諸〻の位格が光を放つてゐる。各〻の人格の光が他の位格に映ずるのみならず、その位格自身にも映ずるのである。このやうな光に滿ちた分裂にこそ初めて美の極地が見られる。(エックハルトは、基督教の教義から採り來つた三つの神的な位格卽ち父なる神、息子なる神、聖靈の三者を全一的な生命の表現と見、之を以て全一的な生命の分裂・自己顯現・展開及び多様性の姿となしてゐる。不變なる一者は、全一から多様へ、多様から全一への辯證法的な動きとして、右のやうな自己顯現をその本質となしてゐる。)されば神の本性は美であるが、それは豊かさの顯現として美なのである。多様性をめざす涸らぬ動き、停まることのない動きの中に見られる美である。この動きにこそ、美の完成があるのである。己れに立ち歸つた魂、卽ち停まることのない神的な動きへ歸入した魂の崇高な氣分も、この完成した美から生れる。

この大いなる生命の動きこそ、分裂してはまた己れに立ち歸る一者なのである。「一者は泉の如く湧き出づるものである。」(Das Eine ist quillend) とエックハルトは言つてゐる。或ひは「神に對しては何一つとして死するものはない。萬物は神の中にあつて潑溂たる生命を得るのだ。」とも言つてゐる。神とは沸々とたぎる生命を内に宿した神であるとも言つてゐる。神の生命はそれ自身の中に輝きをもつが故に、何ら「目標」をもつことなく、それ自體がその意味なのである。エックハルトのこのやうな洞察は是亦己れに徹した魂の體驗から汲まれたものである。蓋しこのやうな體驗の最も重要な意味は、人間が之によつて新たな生命を與へられるといふ點にあるが故である。神と一體となるといふことは、神へ向けられた自足的な生活の溢れるばかりの感激に浸るといふことである。生活に感激を覺えれば覺えるほど、生活そのものが生活の意味であることが知られるのみでなく、このやうな生活に目醒めた人間の活動には、「何故」といふことがない。一體

性といふことが一體性そのものの根據であり、從つて一體性は底知れぬ深淵の根源であり、無限の高さに架せられる屋根であり、捉へやうもない擴がりを劃する輪廓である。「生命に向つて未來永劫『汝は何故に生きてゐるのか。』と尋ねる者には、若し生命に口があつて答へるとすれば、『生きんがために生きてゐるのだ。』と答へるであらう。蓋し生命は生命自身の根源によつて生き、それ自身の中から湧き出づるが故である。されば生命は何故にといふことでなく、只管己れのために生きるのである。同樣に己れの中なる根源に從つて活動する人間に向つて、『何故に汝は制作活動をなすのか。』と尋ねるならば、『私は制作のために制作してゐるのだ。』と答へるだけであらう。」といふ有名な句も、このやうな意味に解してこそ、初めて理解せられるであらう。

かういつた言葉は未だ練達せざる者乃至世界に眼を向けてゐる人間の立場から見れば、餘りにも無雜作な無意味に近い事と感ぜられよう。だがそれが事實なの

である。事物の神髓に觸れるとき、これ以外に何の言ふべきことがあらう。己れに據つて存在し只管己れのために存在する者についてはこれ以外に言ひやうがないではないか。けれども世界の中に生きてゐるといふ立場から事物を經驗する人間の體驗にとつては、それが我々を動かす場合には輝きとなり、閃きとなり、内より發する光となり、力となり、萬物の完成となる。萬物はその本質上それ自體がそれ自身の意味であり、而もその本質に於ては一つであるが故に、己れに基づく時間空間的な存在要求を斷ち切つて死に盡すのであるが、この死に盡すといふことも、物が時間空間的な事物として己れを完成しようと努力する所に意味がある。これこそ、事物の完成の眞の姿である。一者に於て萬物が己れに立ち歸るのである。勿論それは同時に時間空間的な世界に於ける時間空間的な事物としてである。「本質が神に於て破壞されるといふのではない。本質は神に於てはその最高の完全な姿に從つて完成せられるのである」。「蓋し神は自然の破壞者ではない。

神は自然を完成せしめるのである。」とも言つてゐる。

自然の完成と言へば、直ちに地上的なものの破壞と考へ、時間空間的な事物への一切の執着を魂によつて克服せねばならぬ以上、時間空間的な事物は、神的なものとは相容れないのだといふ結論を下すのは、いかにもありがちなことである。從つて時間空間的な事物の完成は、時間空間的な生活を棄てる所にあると考へられてゐる。就中人間にとつては存在の時間空間的な性格を斷つことが必要だと考へられてゐる。卽ちその勢の赴く所、世界の克服から一歩を進めて、世界を否定し、禁慾的な立場に立つて世界を逃避することこそ、唯一の道であるといふのである。エックハルトの考へる所は、これとは全く反對である。時間空間的な事物が時間空間的な差別相に基づく存在を主張しようとする意志を克服すべしといふのである。世界に於ける時間空間的な我意を克服することが、時間空間的な世界を、その本質のままに理解し肯定し建設する前提である。エックハルトは人間を

義務から免れしめるやうな宗教的修行には嚴しく反對してゐる。否、人間は銘々獨自の道を進むべきである。或る人間には暫しの嚴格な苦行とかその他のあらゆる修行が適するではあらうが、他の人間には不適當であるばかりでなく、寧ろ有害となり、內面的に不實なものとなる。否、人間は絶えず己れを鍛へ、神の境地に達するやうに努めるべきだと說く反面には、かういつた努力を完全に爲し遂げれば、人間は最早人間ではないのだと考へ、神を見ることにのみ終始するやうな行き方は、人間の本性に背くが故に贊同し難いものだと言つてゐる。「魂が妨げられることなく神てふ財寶を絶えず體驗するとすれば、魂は最早この財寶から離れることが出來ず、從つて肉體を規定する機能を停止するであらう」。これこそ神の意志に背くものだと考へられる。神は人間が地上的な生活を營むことをも要求してゐる。「かういつたことは地上の生活と相容れもしなければ、地上の生活に相應はしいものでもないが故に、誠實なる神は折に觸れては永遠なる一者を蔽

ひ隱すのだ。これは誠實なる醫師の行ふ所と異らない。言ひ換へれば、人間が神卽ち無差別的な一者を見ることにのみ終始することが出來ないといふ點に、地上の生活に於ける人間の任務といふことについての神の意志が表はれてゐる」。同じ說敎の中で、エックハルトは解脫の心の要求が畢竟人間として避けることの出來ない外面的な制作活動と如何に調和し得るかといふ問ひに答へてゐる。

二　內面性と活動

「神祕主義」といふ言葉が、エックハルトを理解する途上に於て、なまじ學者的な妨げとなることは、先に述べた通りである。エックハルトの認識を、神に醉つた魂の陶醉狀態によつて充足される神祕主義と混同することが行はれ勝ちである。このやうな特殊な狀態を求めようとする努力をエックハルトは手嚴しく非難

してゐる。エックハルトの目標とする所は、感情的な體驗とか、外界に眼を背けた神への陶醉とかではなく、力強く生きる日常生活、能動的な生活である。この點を更に深く理解する必要がある。エックハルトの要求する外界からの隔絶と、外界に於ける能動的な生活とは、いかに調和するのであらうか。この兩者は互ひに調和するばかりでなく、互ひに一は他の源泉となるもの、否、窮極に於ては同じものと考へられてゐる。然らばそれはどういふわけであるか。この問ひも亦、例によつてエックハルトの敎理の核心に觸れ、正しい生活の根源、即ち魂の本質につながり、人間の靈的中核の覺醒即ち神の經驗へ歸するのである。

エックハルトが能動的な生活を禮讚してゐることは、彼の事業全體を通じて見られる。エックハルトが神と世界との分離を拒否してゐることを示す箇所は、以上にも多々引用した通りであるが、ただそれだけには止まらない。「人間はこの外面的な生活そのものに力を傾け盡すべきである。」といふやうな端的な言葉も

述べてゐる。世界から引き退くといふことは、内面的な態度のみについて言ふことであつて、世界の中なる外面的な存在とか外面的な引退とかには、些かの係はりもない。隔絶といふことは、單に受動的に靜かな内面性に引き籠つてゐねばならないやうな法悦的な狀態であるとか、世界に於ける活動から引き離されたものだとかいふやうに誤解され勝ちではあるが、決してそんなものではない。人間は世界に於ける徒らなる分散から引き退かねばならないといふことを、未だ練達せざるものに向つて何よりも先づ大いに要求してゐるだけに、その反面には、神に醉つた受動的な態度に伴ふ危險をも、エックハルトは絶えず念頭に置いてゐる。時と場合によつては練達の一時的な手段となる事も、それが決して眞の意味乃至目標であるとは言へない。この點を示す極めて力强い言葉がある。「種々な内面的な能力と外面的な能力とを具へた人間が、隱遁生活をする場合を考へて見よう。さういふ場合には、最早何等の表情もなければ限定といふやうなこともない精神

狀態に入つたわけである。それと同時に、内面的にも外面的にも何等活動をもたないわけである。このやうな場合に、何等かの行爲がおのづから現はれて來はしないかといふ點に細心の注意を拂つて見るがよい。それでも猶依然として何等かの制作に着手し之が遂行を引き受けて見たいといふ氣持にならない場合には、内面に向つての活動にでも、外面に向つての活動にでも、奮起一番突入するがよい」。

他方、右のやうな引用箇所とは反對に、人間は世界から脱却すべしとか世界を脱落せしむべしとかいふやうな箇所があるが、これがまた理解を困難ならしめる點である。卽ち問題は、右に述べた外面的な態度と内面的な態度との對立だけではなく、練達の士と未だ練達せざる者、目醒めた者と未だ目醒めざる者との區別である。エックハルトは直截に言つてゐる、「さういつた事に馴れてゐない人間が、練達の士と同じ態度や行動を採らうとすれば、我と我が身を墮落させてしま

ふ以外に、何の益もないであらう。世界を脱却し世界を離れることができてこそ、恣まに振舞つて而も何の屈託もなく、何の害を蒙ることもなく、事物を享受し、事物の缺乏に甘んずることが出來るのである。」と。未だ練達せざる者は己れを鍛へ、その本然的な存在に於て生れ變らねばならない。他方生れ變つた人間は、本然的な存在を行爲に於て證示せねばならない。行爲とは、世界に於て我々に課せられた行爲である。而もこの行爲は、目醒めた者の行爲として、彼自身の内面性とぴつたり調和してゐる。エックハルトは言つてゐる、「己れの内面を逃れたり離れたり拒否したりしなければならないといふ態度からでなく、内面の統一を現實の中へ爆發させ、現實をば内面の統一の中へ引き入れ、終始虚心坦懷に活動し得るやうに、己れの内面に基づき、己れの内面とともに、而も己れの内面に於て活動をなし得るやうな習慣をつけるべきである。」と。未だ練達せざる者が、徒らなる禁慾と瞑想的な修行だけでなく、日常的な義務の眞只中で神を求めるべきで

あると同樣に、練達の士乃至「目醒めた者」も、永遠なる一者の直觀に終始すべきではない。そのやうな人間は大いに活動すべきである。而もこれは決して矛盾や對立ではない。否、「ここに於ては直觀の働きをも藏する唯一つの根基へ突入し、この直觀の內容を活動を通じて稔らせるといふ行き方があるのみである。かくてこそ初めて直觀の眞の目的に到達せられる。活動の狀態にあるときに我々の捉へる神は、直觀の狀態に於て捉へる神と異らない。活動にとつては、直觀の狀態が安住と完成であり、直觀にとつては、活動の狀態が安住と完成である。たゞ一つの直觀の狀態が活動を通じて稔らされようとしてゐる」。何れの狀態にあつても捉へる神は一つであるといふことが、決定的な點であるが、差し當り理解し難いので、エックハルトはさほど練達せざる者のために附言してゐる、「直觀に於ては汝は汝自身に奉仕するが、よい事業に於ては汝は多くの人間に奉仕するのだ。」と。勿論エックハルトは、よい事業がそれ自身よいのではなく、よい存在

から流れ出る場合によい事業となるのだといふことを、繰り返し說いてゐる。否、「神は、外面的な事業をなせよと、口に出して命じたまうたことはない。」とか、「外面的な事業は本來の意味に於て善いもの又は神的なものではない。」とさへも言つてゐる。（罪に問はれたエックハルトの主張第十六條・第十七條。）されぱエックハルトはまた、「何をしたらよいかといふことばかりいつも思ひ煩ふべきでなく、自分が何であればよいかを熟慮した方がよからう。自分と自分の態度・性質が善くさへあれば、自分の事業も大いに光を放つことだらう。汝が正しければ、汝の事業も正しい。行爲によつて救はれようと思ふ勿れ。救濟は存在に求めねばならない。事業が我々を神聖にするのでなく、我々が事業を神聖にしなければならない。事業がどんなに立派でも、その事業を爲したが故に事業が我々を神聖にするといふわけではない。我々が存在をもち本質をもつ場合に始めて、飮食・睡眠・覺醒、その他何事たるを問はず、我々が一切の行爲を神聖にするのである。」と言つてゐ

る。要はこの存在である。この存在に狂ひがなければ、內面性と活動とは渾然一體となる。而してこの存在は、神との一體的な存在であり、己れに立ち歸る魂の突き進む本質、卽ち神そのものに他ならない。而もこのやうに突き進んだ境地は、神祕的な沈潛によつて謂はば絕對者に包まれ魂が無限なものの中に流れ去り融け込んでしまふ法悅的な受動の態度ではない。否寧ろ、神的存在の體驗は、なし得るだけの活動をなし盡す他に道のない極めて生動的な經驗なのである。だが、ここにも亦重大な誤解の虞れがある。神の體驗と世界に於ける活動との關係は、謂はば人間が一方の深みから他方の表面へ浮び上るといふやうなものではない。かくては、再び正しい存在と正しい活動との間に對立を置き、內面性と外面的な世界との區別を固持することとなるであらう。さればとて、神の體驗が謂はば日常の生活の中に躍動し、生活に色彩を與へるべきだといふのでもない。勿論、かうした事もあるにはあるが、未だ以て眞諦であるとは言ひ難い。妙諦は寧ろ、正し

いあり方と正しい働き方とが一つである所にのみあるのである。だが、それは何故であらうか。蓋し、眞の隔絶の境地にあつて人間が魂の本質に目醒めたとき、魂は我意に煩はされることなく、神の意志と一致し、而も神の意志を何等か對象的な事物の如くに經驗するのでなく、活動、眞に止むに止まれぬ活動として經驗するが故である。「神の本性に具はるものは悉く、神に歸一した正しい人間にも具はつてゐる。されぱこのやうな人間は神のわざを悉く果し、神とともに天と地とを創造したのである。このやうな人は永遠な言葉を造つた者であり、神はこのやうな人間なくしては、何事をもなし得ないであらう」。「善良な人間は己れの意志をできるだけ神の意志に近づけるがよい。神の意志を悉く己れの意志となすがよい。私が罪を犯した人間となることを、何等かの意味で萬一神が望みたまふならば、私はその罪を犯さなければよかつたなどとは思はないだらう。これが眞の懺悔の心境である」。

ここにも亦、エックハルトを理解する上の從來からの根本的な困難がある。核心は對象的な認識によつて捉へることはできない。自らかくあり、かくあらずにはをれないといふ生きた實踐によつてのみ捉へることができる。

自ら練達の士であらねばならない。どれほど練達の士となつてゐるか、どれほど練達の士となる途上にあるかによつて、理解の限度が劃されてゐる。練達の士はおのが本質の存在に於て生れ變つてゐる。未だ練達せざる者は、要は我々の行爲でなく我々の存在にあることを知らねばならない。練達の士は、存在が行爲に證示されることを知らねばならない。然らばこの行爲の目的は何か。眞の活動の意味は、畢竟そも奈邊にありや。苦惱からの救濟であらうか。否、正義にあるのである。

三　正義と苦惱

然らばエックハルトの苦惱に對する態度は如何。この問題に對する解答は、また別な方面から、エックハルトに對する重大な誤解を防ぐこととなる。それは、人間の目標が、兎も角何等かの淨福に達することにあると考へる誤解である。個我と世界とを己れのうちに沈默せしめた人間は、これに次いで必ずや己れの魂の中に神の生誕を見、この生誕に於て豫ねて憧れてゐた淨福的な靜けさを見出だすものであるといふのが、エックハルトの所說であるが如くにも思はれるであらう。だが併し、エックハルトの謂ふ所の「目醒めた者」は、同時に、最早一切の苦惱を逃れ、苦惱なき生活を享受するやうな意味に於て「救濟された者」なのだと言ふわけには行かない。そんな事では、未だ遠く的を外れてゐる。人間の任務、人

生の意義といふもののエックハルトの考へ方には、神に醉つた狀態を目標と考へたり、苦惱からの救濟を人間の中なる神の生誕の意義だと主張したりしようとする氣持は毛頭ないのである。人間は神によつて苦惱に對する慰藉を與へられるといふことは、勿論エックハルトの知る所である。彼の「慰藉の書」は、その最も著名な著述の一つである。併しここに於ても、例によつて、苦惱は極めて積極的な意味をもつものと考へられてゐる。苦惱に於て人間は幾たびとなく己れの間違つた生活を意識するのであるから、苦惱は人間を正しい生活へ導く最善の手段であり、エックハルトの言葉によれば「神へ導く最も駿足な動物」である。苦惱が大きければ大きい程、それだけ駿足に人間を神へ導くのであるが、「神の御許に達する」ことの意味は、苦惱から救はれるにあるのでなく、正義の狀態に入るにあるのである。救濟ではなく、正しい人間たることが、人間の目標である。「地上に於て蒙るあらゆる苦惱が正義にも伴ふものであるとしても、彼等（正しい人間）

は何等意に介しない。彼等は神と正義のもとに毅然として立つてゐる」。されば救濟とは苦惱から解放された自由ではなく、不斷の正義の活動の力に包攝されることである。神の御許へ突き進むことは、正しい人間の生活を爲し得る道であり、正しく生き正しく働く境地に入ることである。

　正義とは何か。正しい人間は、自己中心の存在要求を脱却して、あらゆる規定を超えた根基によつて生きるのである。けれども、かくすることによつて、正しい人間は一切の規定を充足せしめ、己れ自身の規定をも充足せしめるのである。自己中心の存在を要求する事物の時間空間的な性質に足場を置いてゐなければこそ、正しい人間は、事物をも己れをも、眞の本質のままに完成することができるのである。卽ち我々があるべき姿となつてゐれば、我々の存在は我々自身の中から發したものでなく、寧ろ我々の規定された存在の死滅から發し、規定された存在の外（そと）から發してゐる。この「外（そと）」こそは、規定された自我よりは大きな自我に

於ける自我的な存在なのである。これが我々の本質である。それは我々の偏狹さの死滅なるが故に、大いなる充實である。人間が眞に自我たり得んがためには、謂はば自我を脱出せねばならない。自我を脱出して眞に自我たる生活をなすことが出來れば、最早人間と神との區別はなく、かくして正義に基づく活動の狀態にあるのである。かくして人間は、あらゆる事業を神聖にする存在を得るのだ。未だ練達せざる者は、このやうな存在を努力によつて始めて得るに反し、練達の士にあつては、その行爲の當然性に於て、この存在がおのづから現はれる。このやうな行爲は、「何故といふことのない」(sunder warumbe) 行爲であり、神を求め神を見出だす人間の行爲である。何事につけても、いかなる場合にも、「己れの利益を(從つて己れの救濟をも) 求めるのでなく、神を求め、神を捉へることをおのが習性とせねばならない」。このやうな活動が、練達の士にとつては、おのが本質の巧まざる表現である。練達の士の活動は、「恰も石が本性に從つて大地を壓せずに

はをれないが如く」であるとエックハルトは言つてゐる。

次に正しい人間が世界に對して採る態度は如何。世界が世界自身に基づく存在を要求する場合には世界を棄てねばならず、世界の本質が神並びに人間の魂と一つになつてゐるといふ意味からは世界を愛さねばならないといふ點から考へれば、世界に對する態度の採り方はおのづから明かである。私が規定された人間であり萬象が規定された事物であるといふこの規定性は、私と世界とが只管にこの規定性に基づく存在のみを要求する場合には、惡であるけれども、私にせよ世界にせよ、しかじかの規定をもつ本質として、根基に基づく生命をもち、根基を目指した生命をもつ場合には、決して惡いものではない。世界をその本質に基づいて認識する場合には、全一たる世界は言ふまでもなく善である。蓋しその本質は神であり、凡そ偏狹さとは反對のもの、一切の偏狹さの死滅なるが故である。それ自身に基づく存在を要求する偏狹さとしての規定性と、本質の顯現としての規定性

とを區別することは、この場合極めて重要である。人間としての任務は、この本質を認識しこれを一切の規定の深義として規定の中に顯現せしめることである。

何事に遭遇しても、そこに神の意志を認め、何の不平もなく素直にこれを受け容れるやうにせよといふ敎へを、エックハルトは幾たびとなく垂れてゐるが、これは、ただ拱手傍觀せよといふ意味ではない。事物をば、事物に宿る任務として受け取れといふのである。卽ち具體的な歷史的情勢に於て與へられた任務を素直に受け容れることによつて、人間は始めて己れの本質に基づく働きをなし得る。他方、己れの本質に基づく働きをなし得るには、飽くまでも己れを主張しようとする世界の立場から見れば、死することによつて生きるのでなければならない。人間が世界の中で神に相應はしく生き神に相應はしく働くための前提は、世界に對して死してゐるとともに、絕えず新たに死するといふことであるが、これこそは、人間に與へられた情勢の特異なる所以である。

さて、最後に、目覺めた人間、卽ち世界への徒らなる分散を脫却して隔絕の境地に立ち歸つた人間の奉ずべき世界は、いかなる世界であるか、といふ問題に觸れよう。それは一段と高い世界、一段とよい世界であらうか。卽ちこの現實世界の謂はば理念であつて、現實世界はこの理念のみすぼらしい現象に過ぎないのであらうか。否、さうではない。それはあるがままの世界なのだ。この私が時間空間的な規定性のまゝに拘束されてゐる世界なのだ。世界による拘束を脫却するのみでなく、この拘束を解かねばならないといふ必要をも脫却した自由の境地にあるとき、否、世界の眞の存在を世界の規定性と對立した姿で眺めるばかりでなく、規定性そのものの中に眞の存在を經驗するとき、人間は始めて本質へ突き進んだこととなる。未だ練達せざる者は具體的な世界と世界の本質とを對立させ、無常の世界に生きて本質に反抗してゐる。練達の士となる途上にある者は世界の本質を世界の無常に對立したものと考へ、一切の規定性と無常とに反抗し、本質を常

住不變なものと考へて、本質にみ膠着しようとする。たが本質は何等かういつた對立には係はりがない。從つて目醒めた者卽ち練達の士にとつては、規定性と無常とに顯現せられるべき世界の眞の本質を肯定するが故に、世界の規定性を否定すべき理由はない。世界を己れの內面に於て克服し、而も世界の本質に從ひ、世界の規定性の表現を通じて、世界の中に自己の充足を見出だし、かくして世界を行ずるのである。かくして苦惱の中にも、正義を行ふのである。

一四　エックハルトに於ける流動性

神性卽ち神的「一者」が神的一者たる所以のものは、それが己れ自身を本質顯現せしめる生命なるが故である。卽ち一者の顯現たることが多樣性の本質であると同樣に、多樣性の中に顯現されることが一者の本質である。

一者の中にあるもののみが生命をもつてゐる。永遠なる自己顯現の動きの中にあるもののみが生命をもつてゐる。大いなる顯現の動きから離れてしまつたもの、言ひ換へれば己れ自身卽ちおのが孤立の姿に基づく存在を主張し、乃至流動性を失つて己れを固定させ（sich festsetzen）てしまつたものは、神を離れ、本質を失ひ、一者から離脱したものである。

一者は多樣性の中に己れを顯現する所にその本質があり、多樣性は一者を顯現する所にその本質がある。例へば人間はおのが本質に不忠實となれば本來の生命を失ひ、おのが本質に合致し孤立の姿のままに普遍的な一者を顯現するに至れば忽ち本來の生命を囘復するのである。人間の本質からの離叛には二通りある。人間は孤立の姿のままに個我的な自我として己れを固定させ、事物の中の事物として單に時間空間的にのみ自己を主張するやうな場合もあれば、時間空間的な多樣性が本質をもなたないものだといふことを悟つて、普遍的な一者に己れを委ね、

超時間的な安住と超空間的な空虛として、一者になづむ場合もある。これ亦神に背き本質に背いた態度である。蓋し一者の本質は多樣性の中に己れを顯現する點にあり、從つて一者の特殊化として己れを肯定し、己れの時間空間的な姿を通じて一者を顯現する者のみが、おのが神的本質に忠なるが故である。

されば道に明るき人（der Erleuchtete）にとつては、孤立と對象性と對立性とを具へた多樣性が――それ自體一者と對立した一切の事物が――一者の顯現たる限りに於て、そのまま一者なのである。是亦道に明るき人の經驗なのであるから、エックハルトは地上の生活に關して「さればこそ私は最後の審判の日までこゝに踏み止まりたいと念じてゐる。」と言つてゐる。大なる認識をもつ者の眼には、「すべての事物の中から神が輝き出でるのだ」。道に明るき人は至る所に神を求め神を見出し、一切の事物を、そこに宿る神的な規定のままに眺め、「途上」（auf dem Wege）の姿として眺めるのである。個我に捉はれ、己れ自身の中に「嵌ま

り込んで動きのとれなくなつた」(in sich festgefahren) 人に限つて、「彼岸にこそ神の存在があるのだと考へてゐる。このやうな人間は、己れを顯現し己れのために生きる一者の大いなる神的なる動きを離れたまま、未だこの大いなる動きに歸入してゐない者なのである」。

されぱこのやうな動きは大いなる平和、大いなる安息であり、一者の自己顯現といふ流れ流れて止まることのない大いなる動きのもつ安息なのである。信心 (Religio) といふことも、固定不變な存在へ繫がりをもつことではなく、時間空間的な存在の中に神的な自然の自己實現の動きを淀みなく行ずることである。信心は「己れに基づく存在を要求する」(aus sich selber sein wollen) 多樣性を克服しようといふ努力のみでなく、多樣性の本質を多樣性として顯現させようとする努力にも見られる。我々は充實を拘束して一者となし、一者を解いて充實とせねばならない。この努力は世界を一者の顯現として我々の眼前に現はし、それが

他ならぬ一者を表はすやうに形造らうとする努力である。これこそ人生の意義たる正義の實現である。人間は己れの住まふ地上の生活の多樣性を、神的なるものの顯現として認識し、形造るべきである。一切の事物が神に起り、神を目標としてゐることを肝に銘ぜねばならない。されば正しい秩序は固定不變な體驗ではなく、運動の秩序である。己れの中に動きのとれなくなつてしまつたものは——よしそれが調和の姿であつても——罪である。されば世間を逃れた者は、世間に捉はれた者と同じく、罪あるものである。

一五　總括にして總括に非ざる總括

我々人間が何事かに思ひを潛め之を解明しようとするときには、對象的な關聯に訴へて物事を考へて行くものである。從つてエックハルトの「教說」をも明確

な形に總括して見たいやうな要求を覺えるであらう。併しこのやうな要求は眞の把握とは相容れないものである。エックハルトの教說の「總括」を試みること自體が、エックハルトの理解の前提たるべき態度とは眞反對の態度をとつてゐるわけである。エックハルトの教說の正しい總括は唯一つしかないであらう。それは頭上に電擊を喰はせて大悟一番せしめることである。いや、これとても未だ眞の總括ではない。眞の總括はおのが本質のままに自明の如く己れを充足し萬事につけて神との一體性を顯現する生活あるのみである。けれどもかうなるためには、本質に相應はしい生命の動きを發動せしめねばならない。エックハルトの思想に充分な概觀を與へただけで一安心したのでは少しも總括にはならない。エックハルトの努力そのものが人間を對象的な思惟によつて陷つた靜的な孤立の狀態から引摺り出して正しい生活へ導かうとするものであつた。エックハルトの教說は魂の直接的な呼びかけであり、思ひ切つてこの魂に身を委ぬべきことを要求してゐ

る。このやうな意味に於て、以下に述べる總括は、その實總括ではなく、向岸から聞える悟道者の「呼び聲」に注意を喚起しようといふのである。

この「向岸からの呼び聲」は、一、人間學的な言葉と、二、形而上學的な言葉と、三、宗敎的な言葉との三様に聞えて來る。或ひは心理的な言葉をも附け加へることが出來よう。

未だ目醒めざる凡人は、世界の多樣性と對象性と對立性と(私と汝、こことそこ、時間の前後、善惡、自我と神)の中に捉はれ、放心と徒らなる分散の中に生きてゐるのであるから、根本的な生れ變りが起らぬ限り、謂はば世界の中に己れを見失ひ、足搔けば足搔くほど己れの境地を惡化せしめてゐる。單に事物の中の事物として懊惱と逼迫の渦中に立ち、只管、時間空間的なものの中に己れを主張しようとしてゐる。けれども人間の本質は、あらゆる事物の本質と同じく、時間空間的なものの中にでなく、超時空的・超對立的・超對象的・絶對的な一、一者の中にある。一

者が少しも歪められずに人間の中に顯現されてゐる所に、人間の魂がある。人間は單に事物の中の事物といふよりは以上のものである。人間は事物と異つて己れの境地を意識することが出來る。一者を自覺し、「火花」(Fünklein)を經驗することが出來る。この火花こそは一者の歪められざる具現としての人間の魂である。このやうな經驗を基礎として、否このやうな經驗の豫感を基礎としてさへも、人間は自發的に踵を返し、頭を廻らせ、決然としておのが生活の意味方向を變へることが出來る。己れの中へ入り込み、己れを一切の多樣性から引き離し、世界、就中己れ自身に對して死に盡すことが出來る。能く是を爲し得れば、大いなる根基の經驗が與へられる。この經驗が人間を生れ變らせる。否、人間の生きる世界をも變らせるのである。かくして人間は、己れの生れ出づる以前に、否世界の存在する以前に己れが如何なるものであつたかを經驗するのである。おのが魂の根基の中に萬物の根基を經驗し、萬物に宿る唯一の根基として、萬物と己れとの虛

しさを經驗するのである。このやうな根本體驗によつて眞に生れ變つた人間となつて生活の中へ立ち歸つて來る。人間は世界の中に斷乎として生き拔き、「制作的な活動に從事すること」によつてのみ、人間として根基に相應はしく己れを充足せしめることが出來る。人間は隔絶の境地に終始すべきではあるけれども、それはただ己れの足場を何ものにも動かされない一者の中に置くといふことであつて、事物の多樣性から逃れることではない。多樣なるものの中に搖ぎなく根基に卽した制作活動を行つてこそ、一者の中に沈默する境地に達したこととなるのである。自らは救はれて一體の境地に達しながら、己れを圍繞する一切の事物の完成に專念し、至る所一者を多樣性の中に顯現し、多樣性を一者によつて形造るのである。人間はいつかは己れの境地を自覺し、頭を廻らし、己れ自身に對して死に盡し、大いなる體驗に到達し、この體驗によつて生れ變り、この生れ變りを世界に於ける活動によつて顯現せねばならない。要は己れのために最早何ものをも

要求しないといふことである。「何か或る事を願ふ者は、善の否定と神の否定とを願ひ、而も神が神自らを己れに對して拒まんことを祈ることになるが故に、願ひの方法を誤り、惡を願ふこととなる」。「名譽たると利益たると信仰心たると聖德たると報いたると天國たるとを問はず、何等か特定の事物を求めることなく、いかにこれらを要求すべき權利をもつてゐても、敢へてこれらを放棄した人間――かくの如き人間にあつては、神はその眞面目を現はすのである」。（罪に問はれたエックハルトの主張第七條・第八條。）

次に形而上的な面を取り擧げて見るに、唯一の眞なる現實、卽ち生命は己れ自身を顯現する一者なのである。このやうな一者は移らふことなく、己れに安住し、未だ分たれず、存在とか非存在とかいふやうなもののもつあらゆる規定を超えたものである。一者は己れのうちに本質顯現するのである。己れのうちに本質顯現するといふことは、何の變化もない安息でありながら、而も死せるものの墳墓の

靜けさではなく、生けるものの無限の生命の靜けさなのである。さればこそあらゆる規定を脱した一者が、あらゆる規定の根源となり、無差別的なものがあらゆる差別の源泉となるのである。一者が渝ることのない動きとして永遠の流轉の中に己れを「表はし」(darstellen)、己れを多樣性の中に顯現し、己れを規定して多樣性を生み續けて行く所に一者の本質がある。されば一者は多樣性であり、多樣性は一者である。(尤もこの「である」といふ言葉は普通の論理的な連辭よりも高い意味をもつことは言ふまでもない)。エックハルトの表現によれば、無差別的な一者は己れを規定して「根源形象」(Urbilder)乃至「永遠の理念(イデア)」(ewige Ideen)(この言葉はプラトーを思はせるものがある)の王國と化するのである。根源形象は絶えず己れを規定して根源とは寧ろ對立的なものとなり、空間的な竝列及び對立の關係として固定化し、安息のない時間的な前後關係と化するのであるけれども、無差別的な一者が多樣なものの中に己れを顯現するが如く、超時間的なものが時間空間的

なものの中に己れを顯現するのである。他方多樣なもの、時間空間的なものは、一者たる己れの本質を意識し、己れを完成せしめることによつて己れを充足させることが出來る。かくして一者と多者とは對立したものではなく、何れも同じ大いなる生命の動きなるが故に、同一のものである。從つて徒らなる分散から一者へ立ち歸る歸鄕（Heimkehr）の意味も亦「安着と心地よい滯在」（Angekommen und selig Verweilen）ではなく、再出發、「何故といふことのない」（sunder Warumbe）再出發なのである。（この言葉も亦プラトーを思はせるものがある。）このやうな永遠の過程が現實なのである。この永遠の動きを旨として、出で入る息にもおのが本質を體し、おのが本質を顯現せしめては再び之を根基の中へ取り戻し、更に再び顯現せしめてこそ、人間も事物も現實と調和を保ち得るのである。けれどもそれは顯現を主とすべきであつて、取り戻すことを主とすべきではない。己れの中に己れを固定させこの永遠の根基卽ち生命そのものの永遠の自己展開の動き

から離れようとすることは生命に背くものである。とは言へ、己れを固定させるといふことさへも己れを規定し續ける一者の——最も遠く最も低い——顯現なのである。それは一者の轉換の局面に於ける顯現である。

次に宗敎的な言葉として考へるに、エックハルトの所說に含まれる宗敎的な言ひ表はしを總括する上から見て、中心となるものは、「神」(Gott) といふ概念である。生活秩序及びその轉換の構想は、何れも「神」の概念及びその意味轉換を中心としてゐる。時間空間的世界に捉はれた人間の生活秩序がここに含まれてゐるのみでなく、魂の根基に目醒めた人間、否魂と神との一體性に目醒め、この覺醒によつて生れ變つた人間の生活秩序もそこに含まれてゐる。

人間が他の生類と同じく、己れに基づいて生き、己れに基づく存在を要求し、生から死への生存をもつに過ぎない間は、「被造物」(Kreatur) と呼ばれる。時間空間的な存在の遠近の中にのみ生き、飽くまでも自立しようとする人間は、人

間に生命を與へては褫て奪ひ返す一段と高い不可解な遠い力によつて造られた被造物だといふ自覺しかもつてゐない。このやうな力を人間は神と呼び、萬物の主宰者乃至造物主と呼ぶのである。このやうな神の概念は、被造物的な意識と同じく、己れを固定させてしまふやうな邪道に陷つた人間の造り出した概念である。これに反して固定化乃至孤立化を脱却して、己れの根基に立ち歸り、個我に對しても、時間空間的な捉はれに對しても、死に盡してしまふことの出來る人間は、おのがゝゝ魂の中に神を經驗し、最早己れを被造物でなく神と一體たるものとして經驗するのである。これこそは宗教的な意味での根本體驗である。このやうな場合に、人間は己れの魂の中に語り出づる神の永ゝ遠の言葉を聽くのである。エックハルトは神が人間の中に己れを生むことこそ魂の本質なることを經驗するのだとも言つてゐる。かくして人間は內奥の本質に於て神の息ゝ子となる。魂の中なる神の生誕を、エックハルトは、人間に於ける神の自己認識とも言つてゐる。生活根基た

る魂は、この特殊な姿に表はれた神の自覺に他ならない。人間は己れの根基に於て、息子卽ち神の子たることを經驗する。人間は、肉體の中に自己顯現する神である。されば人間は「根基に於ては」眞に神と一體であり、從つて眞の生れ變りによつて神に造り變へられてゐる。「私は神から何ものを與へられ、何ものを期待したいと思つてゐるかについて近頃思ひめぐらして見た。この問題は餘程愼重に考へて見たいと思ふ。蓋し若し私が神から何ものかを與へられる人間だとすれば、私は下僕か奴隷のやうに神の下位に立ち乃至神に劣ることとなり、與ふる神は主人となるであらう。だが永遠の生命にあつては、かういふ事は許されないのだ」。「我々は完全に作り變へられて神となり、變じて神と化するのである。それは恰も祕蹟に於てパンが變じてキリストの肉となるに似てゐる。故に私は變へられて神となるのであるが、それは神が、神自身の同じ――單に似たといふだけでなく――本質として、私を生むといふことである。生きた神に誓つてこゝには、

何等の差別もないのだ」。「父なる神が、人間の姿をとつた獨り子に與へたものは、悉く私にも與へたまうたのだ。その間に何らの除外すべきものはない。その全一的な本質も、完全性も。すべてを息子に與へたまうた如く、私にも與へたまうたのである」。「キリストに關する聖書の記述は悉く、すべての善良にして神と歸一した人間についても、實證されるのである」。「神の本性に具はるものは悉く、神に歸一した正しい人間にも具はつてゐる。さればこのやうな人間は神のわざを悉く果し神とともに天と地とを創造したのである。このやうな人は永遠な言葉を造つた者であり、神はこのやうな人間なくしては、何事もをなし得ないであらう」。「善良なる人間は神の獨り子である」。「『高貴な』人間は、父なる神が永遠の昔から生みたまうた獨り子と同一人である」。「父なる神は私を生んで獨り子たる息子と爲したまうた。神の造り生みたまふものは悉くたゞ一つのものである。されば神は私を何らの差別なく、神の息子として生みたまうたのである」。（罪に問はれた

エックハルトの主張第九條—第十三條、第二十條—第二十二條。）神との一體を經驗して息子となつた人間は、神をば父として胸裡に抱き、遠い不可解な神でなく、おのが根源、おのが故郷たる神、慈悲深き愛の神と感ずるのである。それは、人間が再び神との一體を自覺し、その足場を全的に神の中に置くやうになることを心待ちにしてゐる神である。このやうな場合には神が己れを人間の中へ注ぎ出すのであるから、人間は全的に神によつて生き、また神によつて生くるが故に、生れ變つた人間としてあらゆる事物の中にも神を求め、神を認め、神を産むのである。神の體驗によつて眼を開かれ飛躍の翼を與へられた人間は、その爲す所悉く神の業である。卽ちおのが周圍の自然をその根源形象に從つて完成するのである。このやうな人間は何故といふこともなく（sunder Warumde）、さればこそ撓みなく神を原動力として制作・形成の活動を爲さねばならない。

　これが人間の立場から見た神である。けれどもこれは一面觀に過ぎない。神は

決して「空虚なもの」ではない。天空が微々たる蟲けらよりも遙かに高いと同樣に、本質、即ち一切の事物の根源、即ち「神的本性」(die göttliche Natur) は、神よりも遙かに高く、比較を絶したものである。「神」ならぬこの神性(Gottheit)こそ、宗敎的な意味に於て、無差別的な一者に對應するものである。神性は多樣性から見れば無であり、この世界の光明から見れば暗黑であり、世界の喧騷なる多樣性から見れば靜けき曠野である。神性は不動不變である。神性は神性そのものを見る所にその本質がある。神性が神性そのものを見ることによつて神性は神たる父(Gott-Vater)、神たる息子(Gott-Sohn)、聖靈(heiliger Geist)といふ三つの聖なる位格に分たれる。(エックハルトは基督敎的な術語を用ひて説明を分り易くしてゐる。)神たる父とは見る者、即ち根源的な泉と考へられた神性であり、神たる息子とは見られた者と考へられた神性、即ち特殊化して根源形象の王國となつた神性である。聖靈とは、本質即ち無差別的なものとしての神性が根源形象の中に働

き、根源形象が益〻規定せられて、時間空間的な存在となつて行く過程の眞唯中にあつてこの根源形象を己れの中へ引き戻し、その中核の純粹さを維持して行く力なのである。從つて聖靈は多樣性の中に於ける神的な一體性の意識である。されば、このやうな見方からすれば、「創造者」たる神と「多樣性」にして而も「被造物」たる世界と、何れが先づ始めに存在したかといふ問ひも、無意味な問ひとなる。「何か或るものが、その存在する以前に活動することはできないのであるから、神が先づ世界を創造したといふことはあり得ない。卽ち神は神自身の存在したい瞬間から、世界をも創造したのである」。「同樣に、神が神となり、永遠に且つ完全に己れに等しき神としての息子、而も己れと同じく永遠の息子を生んだその行爲に於て、同時に世界をも創造したのである」。(罪に問はれたエックハルトの主張第一條、第三條。)右に述べた三つの位格の本質は神性である。而して神性の本質はこの三者に分たれるといふことにある。從つて息子は根源形象の王國を表

はす宗教的な名辭である。卽ち充實した己れの姿を眺める神性に他ならない。息子は一切の事物の超時間的な本質であり、その神的な中核である。この中核こそ人間にあつては神の生誕の場所であり、「魂」(Seele)である。卽ち魂は、規定されて人間となつた神的存在の中なる神性の火花である。この事實は時間空間的な存在に捉はれた人間には隱されてゐる。時間空間的な存在を脫することが出來れば「神は魂の中にその永遠の言葉を語り」、「神は魂の中に己れを產む」のである。否寧ろ人間が神を意識するのだと言へよう。蓋しこの過程は「永遠に」この生誕を行ふのみでなく、この過程が魂の本質だからである。現實の中なる人間の本質は神である。神と人間は本質に於ては一つである。神と人間のみでなく、神と萬物も亦然りである。目醒めた人間は時間空間的な存在がそのまま神的な本質であり、未だ目醒めざる者には時間空間的な存在は「神を離れた」ものである。目醒めた人間は萬物を神的規定のままに眺め、己れの自己體驗の中から世界に於ける

活動に必要な安息と方向と尺度とを汲み來る。神性は根源形象を通して萬物の本質に顯現せられ、萬物は本質のままなる自己完成によつて神性へ立ち戻る。而して神性の協力者として何故といふこともなく、この永遠の過程に與り、この過程を遂行するのが人間の運命であり、使命である。

一六 結び

これで何もかもはつきりと合つたやうな氣がする。だが、一見得られたやうに思ふこのはつきりとした氣持は、早やエックハルトに對する理解が終りを告げる萌しである。一大危險信號である。何もかも理解ができ、きちんと整頓されてゐる。一體性と多樣性、神と世界、一は他より出で、他は一に歸入し、而も結局は一つである。何と調和的な洞察であらう。だが一應矛盾を含んだ思想にも何等か

の調和的な秩序があると言つてしまへば、エックハルトを理解することができるやうに考へてゐる間は、洞察が調和的であればあるほど、誤つた、全然無價値な洞察なのだ。問題は思想でもなく、理論でもなく、神學でもなく、宇宙論でもなく、人間であり、人間の生き方であり、人間の救濟である。救濟の道を對象的に認識し得たと思つたときには、早や救濟の道を外れてゐるのだ。人間たる以上我我のうちに存する儼然たる矛盾をそのまに經驗し、この經驗に基づいて絶えず新たに矛盾を克服すればするだけ、救濟の道に踏み留まることが出來る。この對立とその克服を、辯證法的な思想によつてでなく、只管生きた實踐によつて、再び明かにして見よう。

人間は一方に於ては時間空間的な世界に於ける自然的存在として、他方に於ては魂に於ける神的存在として、二面的な存在をもつてゐる。己れの魂に目醒めるとき、人間は本然的な存在に歸入する。本然的な存在に於てのみ、人間は本然的

な生活をもち、この目覺めによつて始めて、本然的な自覺的存在を得るのである。本然的な自覺的存在に於て人間は己れをも世界をも始めて眞に體得するのであるが、人間は絶えず新たにこの本然的な自覺的存在に立ち入らねばならない。差し當り人間は、この自覺的存在とは遙かに異つた存在にある。本然的な存在が神と一つになつてゐるに反し、人間は先づ始めのうちは、我意を以て神に對抗し己れを主張しようとするやうな存在にゐるわけである。この存在こそ、人間が生れ出で育まれる時間空間的な存在であり、人間はこの存在に於ける己れの存立と保障とに努めるのである。殊に疾病と苦惱と死とに對して己れを守らうとする。このやうな存在に對しては、一切の事物を拋棄すべきことを要求する神に歸入した生活は、全く對蹠的なものである。否、神は、この時間空間的な存在にとつては、一應は破壞的なものと見られるが、これに反して、一應人間にとつて自然的な生活、卽ち人間がこの世に於て出來るだけ心地よい暮しを立て身を守つて行く生活

は、神に歸入した生活にとつては、死である。蓋し、時間空間的な世界に於ける我が身の安全を存在の目標となすや否や、神に歸入した存在は破壞されてしまふが故である。かうしたわけで、人間のこの二つの存在形式は、これをいかに峻別しても峻別し過ぎることはない。從つて兩者の一を立てれば他は滅びるのだと言つても、決して誇張ではなく、ありのまゝの事態なのだ。

眞に神を經驗した者は、苟くも自己主張の要求をもつものにとつて神が死滅であることを經驗した筈である。神は、神以外のものたらんとするものを悉く破壞する。他方、己れ自身に基づく存在を要求するものは、己れの中なる神の生誕を破壞し、眞の本質に達しようとする魂を妨げるのである。

だが、このやうな對立は、精神的な生活の初期だけに見られるものではない。目醒めた者への途上にある人間、否、己れの本質に突き進み得た人間も、生ある限り、この二つの生活形式の中に生きてゐる。否、素朴な自己主張の欲求に動搖

を來しながら絶えず之を求めようとする人間こそ、この對立を最も劇しく經驗する。氷炭相容れない二つの存在形式の中に立ち、妥協の道もなく、而も絶えず新たに兩者を克服すべき任務を與へられてゐる。

このやうな意味に於て、遂に安息に到達するを得ないといふことが人間の本質である。世界に對する素朴な執着に生きる人間が、世界に於て安息を得ることができないと同樣に神の御許に達した人間も、安息を得ることが出來ない。一切の目標を世界におくものは、ものみなすべて無常であり、世界の本然的な存在が死であることを、恐しいまでにはつきりと經驗させられる。ひとたび神に到達した人間も、一生涯の間、世界の中に足場を求めようとする誘惑に驅られる。この誘惑を絶えず新たに神に基づいて克服せねばならない。神によつて世界を克服した人間は、人間たる以上、飽くまでもこの世界に留まる他なきことを經驗し、世界を通じて神を顯現する者は、人間として飽くまでも神の御許に留まらねばならぬ

ことを經驗するのである。

されば人間は、遂に神をも世界をも逃れることはできない。目醒めた者の生活は安息に到達した狀態ではなく、絕えず新たに世界から隔絕しては、また改めて世界の中へ踏み込んで行く生活である。それは淨福的な安息ではなく、本質の絕えず新たな獲得なのである。

人間の本質は神的存在にある。世界を脫出することにある。卽ち世界に對して死することにある。果して人間が、このやうな要求を抱かうと抱くまいと、これが人間の本質なのだ。目醒めた者も未だ目醒めざる者も、その本質は等しくこゝにある。目醒めた者が他と異なる所以は、このやうな己れの本質を把握してゐる點にある。人間は目醒めたからといつて、眞に一切のものに對して死に盡くしてしまつたといふわけではなく、生きてゐる限りは、絕えず新たに死し、己れをも世界をも絕えず新たに棄てねばならない。かくてこそ、初めて、人間の本然的な

存在卽ち神との一體的な存在が、絶えず新たに顯現せられるが故である。

このやうな筋道を經驗してこそ、初めて眞の理解が開かれてくる。このやうな對立が撤去し難いものだといふことを經驗した者のみが、その克服を知り、この對立の克服を知る者のみが、その撤去し難いことを知るのである。エックハルトにあつては、この對立は、就中、人間の本質を規定した重要な逆說の中に現はれてゐる。特殊なものは造られたものである。特殊な人間の魂とその一切の能力とも亦、造られたものである。「魂の造られた本質を超えたものがある。被造性に依つて動かされないものがある。何ものでもない或るものがある。神の本性を帶び、それ自體渾然たる一體をなし、何ものとも共通點をもたないものがある」。(「造られたものではなく、造られることもあり得ない何ものかが、魂の中に存してゐる。」――罪に問はれたエックハルトの主張、追加第一條。)

然らば魂の造られざる側面は、造られた側面に對して如何なる關係に立つてゐ

るか。造られざる側面が、造られた側面の傍に、背後に、上に立つてゐるのであらうか。特殊な魂、從つて造られた魂に對して如何なる關係にあるのか。造られざる側面は、他ならぬ造られた魂の本質なのである。特殊なもの、規定せられたものの本質は、規定面が死すること、卽ち規定されたものとして死に盡くすことにある。凡そ規定せられたものの本質は、その死滅にある。この點を眞に理解することが、最も困難である。蓋しここに於ては一見、最も隔たつたもの、卽ち無と規定、死と多樣性神と世界が渾然一體となるが故である。

人間はかうしたことを、最も深く意識することがある。これが自己自身へ目醒めることであり、己れの本質へ突き進むことであり、神に到達することである。人間は己れを無へ置き、生の本質たる死を肯定することによつて己れを見出すのである。だがそは單に、認識的な態度によつて、謂はば無を認識された對象として眼前に置くのでなく、己れをも世界をも、內面的に滅却することによつてのみ

なし得る。このやうな認識が、全的に得られたとき、それが悟りとなる。悟りは隔絶にある。個我と世界との我執を滅却することにある。規定されたものとして己れ自身に基づく存在を主張しようとする個我と世界とを滅却することにある。されば エックハルトは言つてゐる（これは前記引用文の續きである）、「汝が一瞬間でも、否、一瞬間にも充たない短時間でも、汝自身を滅却することが出來れば、一切の事物の根基が、汝のものとなるであらう。」と。

さて、ここで最後の結論を抽き出して見よう。人間の本然的な存在はその時間空間的な存在の死滅にあり、從つて時間空間的な存在とは正に對蹠的なものである。そは同時に人間の本質であり、最も內面的な中核である。從つて、神と一體となつた魂の本質は、正しい人間の本質でもあれば、正しからざる人間の本質でもある。ただ異る點は、正しい人間になれば、この本質が實踐せられてゐるに反して、正しからざる人間に於ては、課題として與へられてゐる點にある。人間は

おのが本然の存在となるべきである。だが併し、まだ本然の存在となつてゐない人間も亦、本然の存在なのである。正しい人間は本然の存在を充實乃至横溢として意識し、生として意識するに反して、正しからざる人間は、これを無として、死として意識するのである。神は正しい人間の本質でもあれば、正しからざる人間の本質でもある。ただそれぞれこの本質のあり方が異つてゐる。未だ練達せざる者が死滅と感ずる所が、練達の士にとつては、出生であり、前者にとつて死である所が、後者にとつては生である。

三、エックハルトの生涯と事業

偉大な神祕家と聞けば、偉大な理論家とか偉大な實行家だといふことは、期待せず、寧ろ理論からも實踐からも遠く隔たつた直覺的な神の觀照を念頭に浮べるとしたものだ。運命のまにまに辿る經路の如何を問はず、深刻な沈潛を以て生活の中心となし、それ以外はすべて價値なきものとなす底の人物を聯想するのが普通である。從つて神祕家の生活形式としては、世の喧騷と壁によつて隔てられた修道院に於けるひつそり閑とした僧侶の生活が一番打つてつけだといふことになるであらう。神の法悅にひたつて自ら經驗した所を他の人間にも分ち與へようとして、この法悅に至る道を切り拓かうと努力する傳道者を聯想するならば、まだ

しもである。兎も角、傍ら偉大な學者でもあり世間的な活動家でもあるなどといふことは、抑〻神祕家とは相容れないもののやうに考へられてゐる。尤も悟道の以前ならば或ひはさうした事もあつたらうと考へる位が關の山である。神祕家は學者的な理論家や實踐的な經綸家ではないといふのが通り相場であるが、マイステル・エックハルトは寧ろかうした人物であつたのだ。エックハルトは理論家として、大學教授として、世の尊崇を一身にあつめた當時竝びなき碩學であり、而も同時に組織的な活動の比類なき才を具へてゐたので、その屬する教團から至高至難の行政地位に就かされてゐた。だがこれこそは、エックハルトの說いた所、他人に要求するとともに神祕的な體驗に於て自らの要請として感得した所と合致してゐた。それは卽ち事業的な活動と直觀とが二にして一であり、從つて人間の理智も敢て否認すべきものでなく、人間そのものと同じく、醇化の過程を經て神への奉仕に振り向けられるべきものだといふことである。されば エックハルトの生

涯は、內面性と事業、直觀と活動、個我と共同體、神と人間世界、といつたものの合一といふ現代の要請に對しても、範を垂れたものである。この合一こそ、すべての根源ではあるが、これが多者乃至對立物へ分裂するのが、普通自然の成り行きであり、ばらばらになつた斷片を糾合して、生きた神的全一體の肢節たらしめ、かくして右の合一を恢復しようとする任務の成就は、今も昔も、眞に生活經綸の才ある者でなくては、覺束ないのである。

史上非凡の人物として後世に與へた影響も絕大でありながら、その生涯について知られる所が、マイステル・エックハルトほど少いものは稀であらう。けれども、この點に却つて何か深い意味があるのかも知れない。もとよりその所說は個性的な體驗から生れたものではあるが、併しそこには彼の經驗した人間の本質的な中核が說かれてゐるのであつて、偶然な個我が說かれてゐるのではない。彼自身の時代に制約された生涯と苦惱は、體驗の動機となつたに過ぎず、體驗の不滅

な本質ではない。そんな事が彼の體驗をして眞理の要諦たらしめたのではない。當時既に然り、我々後世の人間にとつても今猶然りである。彼の著作の成立及び彼の到達した認識の基礎に、どんな個人的な運命があつたかを知らうと知るまいと、彼を理解する上には、差し障りのない事である。彼の說かうとする所が、そんな歷史的な智識によつて、一層明瞭になつたりしはしない。勿論、己れの敬愛する人物については、その運命をも知りたいことは言ふまでもない。多少は好奇心もあれば、敬愛の念もあらうし、或ひはそれによつて作品を直接個人的に理解しようといふ氣持も多少はあらう。或ひは瑣末な身邊生活との繫がりを見れば、作品の氣高さが益〻神々しく輝いて來るといふ理由もあるであらう。事實、我々も今後の硏究によつて、この悟道者の生涯が一層明かになることを望みはするけれども、されぱとて、彼が生涯の目標として掲げてゐた理想そのものの姿が、それによつて變るかも知れないなどと考へてはならない。そんな事で彼の敎說の理

解が促されはしない。同様に、中世の哲學をどんなに博く研究しても、この點は同じである。當時エックハルトは、何の學識も持ち合はせずに唯偉大な人間の語る所を母國語で聞きたいばかりに雲集した蒙昧な民衆に直接に働きかけたのであつたが、我々もこのやうな態度で彼に近附かねばならない。だが彼の生涯について知り得る僅かの資料によつて、ただ一つ言ひ得る事がある。それは、エックハルトといふ人物が、その著作の中で凡そ人間に要求してゐる通りの人物であつたといふことである。

エックハルトは獨逸の心臟部チューリンゲンに於て、ホーホハイムといふ町の士族の息子として生れた。ホーホハイムはチューリンゲンなるゴータ市に程近く、當時ドミニクス敎團の主要な一修道院のあつたエルフルトからも遠くはなかつた。幼にして學に秀で、夙に選ばれて學問の道に進むこととなつた。學校を卒業すると、十八歳で鄕里のエルフルト修道院に入つて修行僧となり、二箇年の修

行期を經て、當時の課程通りに四箇年の豫備研究を終へ、次いでシュトラスブルク大學に三箇年の神學研究をなし、その後僧職を授與せられた。更に三箇年の豫定でケルンの教團所屬の大學へ送られたことから見ても、彼が教團としては高級の經歷を踏むに堪へ得ることは、當時既に疑ひのない所であつた。ケルン大學は當時パリー大學と竝んで、歐洲に於ける最も名聲高き學府であつた。獨逸に於けるドミニクス教團の要職に就くべき者は、悉くケルンで薫淘を受けた。この教團で最も著名な二人の人物、アルベルトゥス・マグヌスとトーマス・アクイナスがケルンで活躍してゐたのも、さして以前の事ではなかつた。勿論エックハルトが同地で二人の講義を聞いた筈はないが、併し彼等の教說は未だ脈々と人の心に殘つてゐたので、エックハルトは思想的には多くの點でトーマスの門弟であつた。ましてやトーマスは教團の模範的な教師と目され、後年聖トーマスと稱へられたに於てをやである。一二九八年のエックハルトの論文の表題には、エックハルト

は中部獨逸全敎團事務の代理長官（副牧師）でエルフルト修道院長だと誌してゐる。これが抑〻エックハルトについて我々の有する最初の文獻である。上述した彼の經歷は、一方には當時全く型通りに決つてゐた硏究課程からおのづから推測されるとともに、右に述べた二つの職を兼ねることが後に至つて不可能となつた事實によつて知られるのである。けれども、そこから先は、依然として僅かながらも詳細な若干の資料が與へられてゐる。

一三〇〇年、エックハルトはパリー大學敎授として敎團から派遣され、同地で學者及び大學敎授としての名聲を築いた。嘖々たる名聲を博しながら、早くも三年後には敎職を去らねばならなかつた。當時敎團にとつては、學識よりも彼が以前に副牧師兼修道院長として揮つてゐた實際的手腕の方が重要であつた。敎團は彼を實際家・行政家として必要とした。當時敎團管轄區の再編成が行はれ、獨逸は北區と南區に分たれた。エックハルトは敎團地域「獨逸」の北區の長となり、

この資格に於て、幾多の修道尼院のほかに五十一の修道男僧院が彼の監督に服した。剩へ數年の後には、隣接地域「ベーメン」に幾多の弊風擾亂が續出して修道院生活が破滅の危機に瀕するや、一三〇七年敏腕を謳はれたエックハルトは無制限の全權を授けられてこの地域の長をも兼ねることとなつた。この點から見ても、エックハルトが教團に於て行政的な任務に堪へ得る唯一の人物として、同時に我武者羅な斷行に必要な性格の持主であつたことは爭はれない。かうした名聲が元となつて、エックハルトは更に他の地位にも推薦されることとなつた。卽ち、一三一〇年、獨逸南區の長にも選ばれ、全獨逸ドミニクス教團の指導者となる筈であつたが、先には北獨逸の長たるべき推薦に直ちに同意した教團總會が、今度の推薦は認めなかつた。但しこれは恐らくエックハルト自身の希望に基づいたものであらう。多年の實務生活の後、元來內面的・思索的な仕事にも興味をもつ人間として、昔のやうに大學教授としての活動を再び續けて見たいといふ氣持が動い

て來た。事實、教團は一三一一年、エックハルトを再びパリー大學へ遣はし、そこで彼の昔の活動が再開された。彼の就任の少し以前から、同大學では一世の碩學で同時にフランチェスコ托鉢教團の最も著名な代表者たるドゥンス・スコトゥスの講義が始まつてゐた。さなきだに、兩教團の間には、態度そのものの多少の差異は措くとしても、長年の仇敵關係があつた。この軋轢がスコトゥスの活動によつて益〻深められた。スコトゥスの說く所は、トーマス・アクイナス及び彼に淵源するドミニクスの傳統とは異つて、人生の意志的な側面を大いに强調する點に特徵があり、延いては救濟の道についても聖書の解釋についても所見を異にしてゐた。兩教團の對立が後日エックハルトの一身上にも活動の上にも飛んだ災難を及ぼすだらうとは、神ならぬ身の知る由もなかつた。

一三一四年、エックハルトは獨逸に落ち着くべくパリーを立ち去つたが、この轉任が、又しても出世の一階梯となつた。卽ちシュトラスブルク大學神學教授と

なり、教團の重要教育機關たる同大學の長となつた。のみならず、獨逸に於ける
この新たな活動によつて、從來以上に教團內の僧侶や學者の狹い世界から步み出
て一般民衆と接觸すべき新たな義務が加はつた。かくしてエックハルトの活動に
於ける最も稔り豐かな時期、殊に彼の本格的な活躍の時代が始まるとともに、世
間的な活動が悲劇的な終焉を告げようとする時期が始まるのである。

シュトラスブルク時代は先づ著作の最も豐富な時期であつた。エックハルトが
その哲學的・宗敎的な見解を偉大なる師匠トーマス・アクィナスの所說との深刻
な學的葛藤の形で敍述したラテン文の大著 Opus Tripartitum は當時成立したも
のである。この大著は彼を思想家として大先哲アルベルトゥス・マグヌス及びト
ーマス・アクィナスと比肩せしめてゐる。だが彼は次第に大說教者として課せら
れた要求に專念した。それは敎團所屬の僧侶や門徒を前にしたラテン語の說敎だ
けでなく、當時シュトラスブルクだけでも七つあつた修道尼院に對する牧師とし

ての配慮と、益〻増加する信女團の世話とを委ねられてゐた。このやうな活動が獨逸語で行はれたといふ點は、後世にとつて特に重要な點である。彼がシュトラスブルクの修道院の禮拜堂で行つた公開說敎に民衆が四方八方から雲集したのも、エックハルトの獨逸語の威力によるものであつた。當時この大師匠の說敎は、沙漠に湧き出でる泉のやうな力をもつてゐたに違ひない。屢〻舊套的な形式に捉はれた敎會の空念佛的な說敎は最早久しい以前から民衆の意には滿たなかつた。剩へ僧侶階級に敎養なく、巷間の說敎者も亦一世の師表たる者は稀であつたから、靈的に救はれず宗敎的に滿たされない民衆は、エックハルトの說敎を新たな力と新たな啓示の泉と感じ、大師匠の壓倒的な言說に心肝を憾ぶられた。大師匠が信女の群に圍まれ暫しの講演の後に聽衆の質疑に應答する活潑な討論會の筆記も、その頃に出來たものである。人間と人間との潑剌たる接觸から生れるこの對決法は、エックハルトの得意とする所であつた。この方法を彼は後に著述にも應用し、

自ら異論を設定しては之を反駁してゐる。彼の影響は益〻大となり、彼の説く所は口から口へと傳へられた。筆記は手から手へと傳へられ、次第に遠隔の地に住む人の手に渡つた。エックハルトの體驗から迸り出る說教の强烈な熱火を浴びて、死滅し切つた敎會信仰の硬直した形式が次第に融けて新たな生命へと目醒める思ひを抱く人間の數が、益〻多くなつて來た。けれども、エックハルトの掲げる精神的な導きの星が中天高く綺羅めけば綺羅めく程、彼自身も、彼を中心とする宗敎運動も、敎會の硬直した敎義を代表すべき彼の地位とは早晩相容れないものとなつた。耳馴れぬ新奇な言葉、言語道斷大膽不敵な言說が、折に觸れては啞然たる僧侶の耳朶を打つた。敎會は耳をそば立てた。敎會の懐へ立ち歸ると言ふよりは、局外の信徒の群へ、否、孤高を誇る一介の人間へ、而も自ら神の御許に立ち敎會を待たずして獨り能く救濟を求めると稱する一介の人間へ歸着する運動に、益〻廣範圍の民衆が捉へられて行く樣を見て、敎會の代表者達は心穩かでなかつ

た。エックハルトがシュトラスブルクで活躍してゐる間にも、異端の糺間が行はれたが、彼はその捲き添へも喰はず、彼の名聲は未だ害はれはしなかつた。それは教團が彼に近く更に名譽ある地位を與へようとしてゐたが故である。卽ち彼は一三一七年、教團が獨逸國內に於て學僧に與へ得る最高の地位を與へられた。彼はケルンへ招かれ、ケルン大學を指導すべき職を授けられた。かくして彼は後進學徒の全責任を引き受ける身となつた。ゾイゼ（Seuse）とかタウレル（Tauler）とかいふやうな人物が當時エックハルトの膝下にあつて、エックハルトから一生忘れ難い印象を與へられたが、この印象が聽ては彼等の活動を通じて獨逸人の信仰生活の發展に不滅の重要性を殘した。併しケルンに於ても、恐らくエックハルトの活動の最も重要な部分は、大學の外にあつたものの如くである。何れにせよ、最も大きな影響を與へたのは、公開說教者として、俗人社會の宗教的な世話人としての彼の活動であつた。だが、學者的な槪念を用ひず自己の宗教的な體驗の火

花を以心傳心的に傳へるこの活動が、エックハルトの致命的な災厄となるに至つた。外部的な生活の絶頂から――學者として處世家として、大學敎授として說敎者として、神學者として牧師として、新たに燃え上がる宗敎運命の中心人物として彼の爲してゐた活躍の絶頂から――醜惡な葛藤と枝葉末節的な攻擊と救ひ難い應酬の淵に轉落し、揚句の果は、瘦せても枯れても敎會の籍に身を列ねる者として最も堪へ難い敎皇の破門を受けることとなつた。だが破門は彼の生前に行はれたのではなかつた。自說の正しさを主張する鬪ひを最後の決着まで鬪ひ得ず、七十歲を前にして、大師匠は、彼に耳を傾け彼を理解した人々の心にその事業を遺して逝いたのである。否、今も猶エックハルトは、彼を理解する者にのみ語つてゐる。未だ嘗て、外部的な勢力が彼の味方となつたことはなかつた。當時も矢張敎會側が勝利を得たのであつた。

教會との鬪ひ

異端者として重大な非難を蒙つた當時、エックハルトは言つてゐる、「私が民衆の受けが惡く、正義のためにこれほど熱烈でなかつたら、嫉視者達は何もそんな仕打ちをしなかつた事だらう。」と。彼は只管信念の力と眞實の力とを以て攻擊者に當つた。だが、權力は寧ろ敵の側にあつたので、彼は外面的には屈せざるを得なかつた。舊套に泥む者の自己主張の意欲を背景とした固定的な形式は、後進の澎湃たる生命が自己主張と自己貫徹の生活形式を生み出すまでは、兎も角新進の生命に對抗して己れを貫徹し、かかる生命を窒死せしめるものであるが、この古來變らぬ原則が、エックハルトの場合にも悲劇的に貫かれた。十四世紀初頭の敎會は全歐羅巴に跨がるこのやうな固定的な形式となつてゐた。かなり硬直して脆

くなつてはゐるものの、未だに之を支へる活力的な要素がないわけではなかつた。敎會は精神的な統一體をなしてゐた。外面的に完璧な組織をもつ秩序であるとともに、內面的に完全に合理化された敎義體系をなしてゐた。而も大部分この秩序の守護者たる敎會の自己主張の意欲から生れた信條をその存立の礎石となしてゐた。從つて何等かの形でこの統一に反抗しようとする一切の運動に對して、この秩序の具現者・守護者たる僧侶達が不倶戴天の仇となつたことは異とするに當らない。統一に背く者は敵であつた。敎會の敎義の固定不變な秩序に對抗して、宗敎的な感情の流動的な力を掲げる者は、敵であつた。就中、敎會の屋臺骨ともいふべき敎義、卽ち神は人間から遠く離れたものであるから、敎會の媒介を必要とするのだといふ敎義を動搖させ、神の直接的な體驗とか魂に於ける神の生誕とかを信仰生活の中心となす者は、敵であつた。苟くも人間が人格的・宗敎的な經驗の灼熱に捉へられたとき、この灼熱が全機構を脅すやうな炎々たる焔と燃え上ら

ぬうちに揉み消してしまはうと、敎會の僧侶達は猜疑的な監視を怠らなかつた。十二世紀から十三世紀、十四紀へかけて、僧侶階級と既存の形式の僞瞞に反抗し、宗敎的な經驗の內面的な眞理を背景として、陰に陽に敎會並びにその代表者達に叛旗を飜へす人間が歐羅巴各地に現はれた。敎會は之に應へるに惡評芬々たる宗敎裁判所を以てした。敎會が危險に脅されれば、宣告によつて信者を火刑に處した。敎會の任命した裁判官は、幾百年の昔から學僧どもが敎會のために衆智を絞つて考へて來た聖書の解釋をば飽くまで正しいものとして、眞實な神の體驗に對抗した。これに反對するやうな主張を奉ずる者は、その罪死に値した。幾千もの人間が、その强烈な信念を斷乎死を以て贖つたのであつた。

一三一七年、シュトラスブルクの司敎が、諸國遍歷のベガルド僧團やその他の團體に對する宗敎裁判を開始した。それはこれらの團體の代表者たちが敎會に背いたが故である。彼等は溺死の刑或ひは火刑に處せられた。彼等の犯罪は、他な

らぬマイステル・エックハルトが日々說敎壇から說いてゐる主張を奉じた點にあつたのであるが、名聲隱れないエックハルトその人に對しては、未だ何等かの行動に出る勇氣もなし、エックハルトは敎會のこの殘虐な斷罪にひるむ色もなく、巍然として說敎を續け、彼を信奉する者が彼の所說ゆゑに攻擊されるやうなことがあれば、遠慮なく彼の名を引き合ひに出して欲しいと言ふのであつた。エックハルトがケルンへ行つた時も、情勢はシュトラスブルクと異らなかつた。異端の迫害による信者の大量火刑は、一三二二年、その頂點に達した。敎會の攻擊の火の手は、次第にエックハルトにも迫つて來た。本來から言へば、修道院に籍を置く者は、俗僧達の支配に服してゐるわけではないのだが、敎會當局は、エックハルトが敎團外の俗人社會に博した歷然たる人望を以て、法的根據となした。敎團の內部に於ても、彼の說敎の及ぼす或る種の影響に對して杞憂を抱き始める者があつた。ドミニクス敎團そのものの內部に於けるかうした疑心暗鬼が募つて、遂

に一三二五年の總會席上に苦情が持ち出されるや、ケルンの大司敎も今や火蓋を切るべき秋が到來したと考へ、敎皇の許にエックハルト糾彈の正式訴願を提起し、異敎的敎理を流布した嫌を以て彼を訴へた。就中エックハルトの筆に成つてハンガリアの女王に捧げられた『神の慰藉の書』(Buch der göttlichen Tröstung)、その他、口から口へと傳へられた說敎の幾多の章句が證據材料となつた。この材料から不穩な箇所を見附けることは易々たるものであつた。蓋しエックハルトにとつては、逆說を用ひることが、眠れる者を呼び醒ます手段であり、その言說中には、例へば目醒めた魂にあつては神がその意味を失つて死ぬのだといふやうな、一見冒瀆的な言句が無數にあつたからである。エックハルトはかうした事態を豫見して『神の慰藉の書』の序文の中で言つてゐる、「だが、無學な人間に敎へを垂れてはならないと言ふならば、抑〻敎へを垂れるといふことはない筈だ。……私の言葉を誤つて理解する者があればゝ、正しい言葉を正しく語つた人間には何の罪

もない筈だ。」と。

事件の正しい解決が時に枝葉末節的な動機によつて妨げられたり、正しからぬ解決が與へられたりするものだといふことを、エックハルトに對して敎皇に持ち込まれた訴願の成り行きが示してゐる。第一回の訴願の時には、偶〻他の紛爭に忙殺されてゐた敎皇は、ドミニクス敎團と氣まづい關係になることを避けようとして、同敎團の主要人物であつたニコラウス・フォン・シュトラスブルクを事件の審理者たらしめた。ニコラウスは斷罪の根據となるべき事由を見出すことが出來ず、エックハルトは無罪となつた。これに剛を煮やしたケルンの大司敎は、エックハルトを正式に異端の故を以て告訴し、かくして事件そのものが公けとなつた。大司敎は敎會を脅すものと見做される危險を剪除しようと固く決心した。エックハルトは、大司敎が獨力で或る敎團の所屬員に對して何等かの行動に出る權利があるとは思つてゐなかつた。而も他方エックハルトは公然たる應酬や正しい

決定ならば、夢にも回避するやうな男ではなかつた。だが大司教にとつては正しい決定などは全然問題ではなく、手剛い競爭相手をやつつけようといふだけであつた。それは彼が二人のフランチェスコ派の僧侶に審理を委ねた事からも明かである。當時ドミニクス教團とフランチェスコ教團との間にあつた深刻な對立抗爭だけを見ても、この二人がエックハルトの有罪を證明するために全力を盡すであらうことは間違ひのない所であつた。剩へ大司教がエックハルトの有罪證人として選んだ二人のドミニクス僧は、教團の紀律を犯した嫌で所罰を受けたことがあり、この機會に江戸の仇を長崎で打たうと考へてゐる手合ひであつた。ドミニクス教團が團結してその敬愛する大師匠の後楯となつたことは言ふまでもない。教團側から教皇に提起した抗議によつて、エックハルトに對する迫害を教皇廳でも續行しようとした兩人の中の一方が逮捕せられた。他方エックハルトは既に審判官の審理を受けてゐた。彼には充分な自信があつた。彼のためならば死をも厭は

ぬ幾千の人の姿が眼前に髣髴としてゐたことであらう。その上自らは教會の信仰と根本的に一致してゐることを確信してゐた。多くの僧侶に見られる上滑りな信仰には反對したものの、教會といふ制度そのものをどうかうしようといふ氣持は毛頭なかつた。否、教皇の決定にはいつでも進んで服する考へであつた。若し己れに不利な決定があるとすれば、それは意見發表の形式に係はることであつて、内容に係はることではないと、始めから信じてゐた。否、彼を親しく識るほどの者は皆さう信じてゐた。「エックハルトの生活を見て知つてゐる者ならば、彼の廉直と信仰とを疑ふことは出來ない。」とは、當時教團幹部の一人が教皇に宛てて誌した言葉である。他方フランチェスコ教團の者は、教皇が第一回の審理をエックハルトと同教團に屬するニコラウス・フォン・シュトラスブルクに委ねた時、教皇その人を異端視してゐた位であつた。かうした雰圍氣の中に裁判が始まつた。

エックハルトは眞理の把持者たる確信を抱いてゐた。己れの言説の中に若干、

形式上思ひ切つた大膽不敵な言說のあることは知つてゐたけれども、このやうな言說も、その體驗的乃至敎育的な意味を考慮すれば、充分納得して貫へるものだと信じてゐた。のみならず、先にも述べたやうに、敎說の形式については、敎皇の裁斷に服する積りであつた。否、眞實の男として、己れの言說中に言說者自身の意志に反して人を邪道に陷らせる虞れのある言說が含まれてゐるといふ點については、場合によつては率直に議論を受け容れる積りでもあつた。例へば魂の神神しさといふ敎へを己れ自身の個我に引き移して考へ、自ら神に成り上つた者としてその實おのが權勢慾のみを滿足させるとすれば、そのためにどれほどの禍が釀されるかは、エックハルト自身百も承知してゐた。從つて右の二點に於てエックハルトは、始めから敎會の意志に從ふ積りであつた。だが、おのが言說の核心、卽ち體驗に基づく信念は、寸毫も讓らうとは考へてゐなかつた。訴訟進行中にエックハルト自身の爲した、關係者達から自說の撤回だと認められた說明も、この

やうに解すべきものである。

ケルンの大司教が何等事件そのものの核心に觸れた解決を求めてゐるのでないといふことに、エックハルトは間もなく氣がついた。そのため彼は事件が教皇の法廷へ持ち出されることを要求してゐた。而も彼は大司教の審理裁判の決定を待たずして、一三二七年二月十三日ケルンのドミニクス教會でラテン文の事件の説明を發表し、自ら更に獨逸語で讀み上げた。それは略〻かうである。自分は終始一貫眞の信仰と正しい生活とを求めて努力して來たが、若し何かの折に何處かで、公然又は隱然と、書いたり述べたり說いたりしたものの中に、信仰上・道德上誤つた事や誤解され易い事があれば、自分は公然且つ明確に之を取消す積りであるといふのであつた。この說明の最後の箇所を引用すれば、「私の主張の何れをも拋棄するといふ積りではないが、理性の誤つた使用に基づくことが證明されるやうな主張があれば、私は之を修正し撤回する積りである。」といつてゐる。この說

明を撤回だと解するは勿論愚である。事實、撤回が行はれたわけでもなく、實際にさう解釋されたとしても、後世の讀者の正しい理解に資する所以ではない。

同年の夏、敎皇廳に於て自己の信念を主張する機會を與へられたとき、エックハルトは、己れの說く所が敎會の趣旨からも支持し得べきことを裁判官に納得させる見込のないことを知つて、非常に失望させられた。裁判官達は、信者を誤らせ過たせ延いては敎會を危くするものと認むべき幾多の點を發見した。エックハルトは先に宣言した所を反復し、委員會の異議の焦點となつた主張を撤回し、その他の所說についても、誤つた意味即ち反信仰的異端的な意味に解される所は、之を撤回した。この「所は」といふ字句は頗る重要である。即ちエックハルトは己れの信念そのものについては妥協を肯んじなかつた。

敎皇の委員會は、エックハルトの著述及び說敎のうち、二十六箇條が――エックハルト自身はさういふ積りで述べたのではないとしても――兎も角文面にあら

はれた所では、教會の信仰と相違し、少くとも異端の萌芽と危險を藏するものだとの認定を下した。この二十六箇條に對する正式の斷罪が下されたのは、同年卽ち一三二七年エックハルトの逝去の後に行はれた。卽ち一三二九年の In argo diminico と題する敎書に於て行はれた。エックハルトの著述及び說敎中の十五箇條は誤つた異端的なものと斷ぜられ、更に十一箇條は詳細に敷衍すればカトリックの敎理と一致するかも知れないが、兎も角、輕卒な、いかがはしい、危險なものだとせられた。今後、右の箇條を記載した著書を流布した者は異端と斷ぜられることとなつた。卽ち文字通り又は內容的に右の箇條を含む書籍は禁ぜられた。かくしてエックハルトの敎理は追放せられ、その自然な發展の道が阻まれた。

右の禁止が實行されたのみでなく、エックハルトの生涯と活動とを記錄に留めてこの大師匠のために不滅の金字塔を樹てようとする者が當時一人も出なかつたといふことは、敎會の權力のいかに大であつたかを物語るものである。このやう

な記錄は學者にして而も敎會と近い關係に立つ人ならでは不可能であつたが故である。かくてエックハルトは、その死去の樣子も知られねば、その葬られた墓地も知られてゐない。敎會が勝利者となつたのである。この勝利は今日までにも及んでゐる。蓋し今日に至るまで獨逸民族が、キリスト敎の偉大な遺産とゲルマン的な魂との融合して眞に生き生きとした姿となつた宗敎を與へられてゐないといふことの最大の責任は、獨逸的・エックハルト的な眞理に對するローマ的・敎會的な權力の勝利にあるからである。

四、一三二九年三月二十七日ヨハネス二十二世によつて罪に問はれたエックハルトの主張

第一條

何故に神は豫め世界を創造しなかつたかといふ問ひに對し、彼（エックハルト）は嘗て答へた（この解答は今日と雖も變らない）、「何か或るものが、その存在する以前に活動することはできないのであるから、神が先づ世界を創造したといふことはあり得ない。卽ち神は神自身の存在したい瞬間から、世界をも創造したのである。」と。

第二條

されば「世界は永遠の昔から存在してゐた。」といふ主張は、事實、之を承認する事が出來る。

第三條

同樣に、神が神となり、永遠に且つ完全に己れに等しき神としての息子、而も己れと同じく永遠の息子を生んだその行爲に於て、同時に世界をも創造したのである。

第四條

同樣に、あらゆる事柄に神の榮光はひとしく現はれ輝き出るものである。惡事にも――罰の惡たると罪の惡たるとを問はず――現はれ出づるのである。

第五條

同樣に、他人を誹謗せんがために誹謗する者は、誹謗の罪により、却つて神を讚へることとなる。誹謗を重ねれば重ねるほど、罪を犯せば犯すほど、それだけ

神を讚へることとなる。

第六條

同様に、神そのものを誹謗する者は、神を讚へる者である。

第七條

同様に、何か或る事を願ふ者は、善の否定と神の否定とを願ひ、而も神が神自らを己れに對して拒まんことを祈ることになるが故に、願ひの方法を誤り、惡を願ふこととなる。

第八條

名譽たると利益たると信仰心たると聖德たると報いたると天國たるとを問はず、何等か特定の事物を求めることなく、いかにこれらを要求すべき權利をもつてゐても、敢へてこれらを抛棄した人間——かくの如き人間にあつては、神はその眞面目を現はすのである。

第九條

私は神から何ものを與へられ、何ものを期待したいと思つてゐるかについて近頃思ひめぐらして見た。この問題は餘程愼重に考へて見たいと思ふ。蓋し若し私が神から何ものかを與へられる人間だとすれば、私は下僕か奴隷のやうに神の下位に立ち乃至神に劣ることとなり、與ふる神は主人となるであらう。だが永遠の生命にあつては、かういふ事は許されないのだ。

第十條

我々は完全に作り變へられて神となり、變じて神と化するのである。それは恰も祕蹟に於てパンが變じてキリストの肉となるに似てゐる。故に私は變へられて神となるのであるが、それは神が、神自身の同じ――單に似たといふだけでなく――本質として、私を生むといふことである。生きた神に誓つて、ここには何等の差別もないのだ。

第十一條

父なる神が、人間の姿をとつた獨り子に與へたものは、悉く私にも與へたまうたのだ。その間に何らの除外すべきものはない。その全一的な本質も、完全性も、すべてを息子に與へたまうた如く、私にも與へたまうたのである。

第十二條

キリストに關する聖書の記述は悉く、すべての善良にして神と歸一した人間についても、實證されるのである。

第十三條

神の本性に具はるものは悉く、神に歸一した正しい人間にも具はつてゐる。さればこのやうな人間は神のわざを悉く果し神とともに天と地とを創造したのである。このやうな人は永遠な言葉を造つた者であり、神はこのやうな人間なくしては、何事をもなし得ないであらう。

第十四條

善良な人間は己れの意志をできるだけ神の意志に近づけるがよい。神の意志を悉く己れの意志となすがよい。私が罪を犯した人間となることを、何等かの意味で萬一神が望みたまふならば、私はその罪を犯さなければよかつたなどとは思はないだらう。これが眞の懺悔の心境である。

第十五條

若し人間が千の死罪を犯したとしても、このやうな人間が何等疚しさを感じてゐないならば、その罪を犯さなければよかつたなどと思ふ必要はない。

第十六條

神は、外面的な事業をなせよと、口に出して命じたまうたことはない。

第十七條

外面的な事業は本來の意味に於て善いもの又は神的なものではない。神も亦、

本來は、外面的な事業を起したり生んだりするものではない。

第十八條

事業の成果を擧げようではないか。だが我々人間を善良ならしめることのできない外面的な事業の成果をではなく、父なる神が我々のうちに宿つて生み出し爲し遂げる內面的な事業の成果を。

第十九條

神は魂を愛したまふ。外面的な事業を愛したまふのではない。

第二十條

善良なる人間は神の獨り子である。

第二十一條

「高貴な」人間は、父なる神が永遠の昔から生みたまうた獨り子と同一人である。

第二十二條

父なる神は私を生んで獨り子たる息子と爲したまうた。神の造り生みたまふものは悉くただ一つのものである。されば神は私を何らの差別なく、神の息子として生みたまうたのである。

第二十三條

神は無條件に且つどの點から見ても、ただ一柱である。されば神の中には、その實體にも活動にも、何等多樣性を認めることができない。蓋し二樣性乃至差別相の認められるところには、神は認められないからである。何となれば神はあらゆる數の外、數の上なるただ一柱の神であり、他者と合して一者を成すのではないが故である。是を以て之を見るに、神には差別は存し得ず且つ認め得ないのである。

第二十四條

神にあつては、實體に關しても、位格に關しても、何等差別を設けることは許されない。それが證據には、實體そのものは一つであり、而もかの一者に他ならず、他方それぞれの位格も一つであり、而もこのやうな實體と同じ一者なのである。

第二十五條

「シモンよ、汝はこの女を愛するにもましてわれを愛するか。」といふ言葉の意味は明かに、「ここなるこの女を愛する以上に愛するか、卽ち甚だ愛してはゐるが、完全には愛してゐないのか。」といふ意味である。蓋し第一位第二位を云云し事の多寡を問題とする限りは、强弱の程度と順位とがあるわけである。然るに一者の中には程度も順位もあり得ない。從つて同胞を愛するにもまして神を愛する者は、甚だ神を愛してはゐるが、完全に愛してはゐないのである。

第二十六條

あらゆる被造物はただ一つの純然たる無である。予が謂ふ心は、あらゆる被造物が取るにも足らぬものだとか何とかといふのではなく、要するにただ一つの純然たる無だといふのである。

前記エックハルトに對する告發の理由となつたのは、上記のほかに同人が次のやうな言葉を連ねた他の主張をも說いたといふことである。

第一條

造られたものでもなく、造られることもあり得ない何ものかが、魂の中に存してゐる。魂なるものが抑々かうした性質のものだとすれば、魂は造られたものでもなく、造られることもあり得ないと言へよう。而してこれが知性なのである。

第二條

神は善いものでもなければ、何か他のものに優つたものでもなく、完全なものでもない。私が神は善いものだといへば、恰も白を黑と言ふが如く、背理である。

マイステル・エックハルトに關する獨逸語文獻

Fr. Pfeiffer. Meister Eckehart (Mittelhochdeutsch) 1857.

H. Büttner. Meister Eckeharts Schriften und Predigten, Jena 1912.

J. Bernart, Deutsche Mystiker, Bd. III, München 1920.

Schulze-Maizier. Meister Eckeharts deutsche Predigten und Traktate, Leipzig 1938.

昭和十八年十一月一日初版印刷
昭和十八年十一月十八日初版發行（三〇〇〇部）

マイステル・エックハルト

定價（停）二圓
特別行爲税相當額 七錢
合計金 二圓七錢

譯者 橋本文夫（はしもとふみを）

發行者 東京都麴町區内幸町二ノ十二内幸ビル 佐々木隆彦

印刷者 東京都神田區錦町三ノ十一 （東東四一） 白井赫太郎

出版會承認 イ250247

發行所 東京都麴町區内幸町二ノ一二内幸ビル 株式會社 理想社
電話銀座(57)三四三七番 三四三八番
振替東京七八三〇三番
會員番號一四〇五〇八番

精興社印刷

配給元
日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

